# 大 田 屋 窯 跡

── 一般国道 9 号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 W ── **石見焼関連遺跡調査報告 3** 



2002年10月

国土交通省浜田工事事務所島根界教育委員会

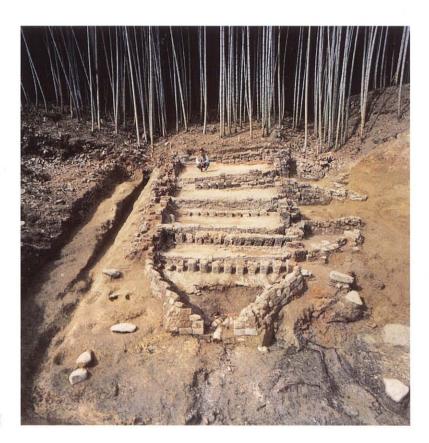
# おお た や かま あと 大 田 屋 窯 跡

2002年10月

国土交通省浜田工事事務所 島 根 県 教 育 委 員 会



大田屋窯跡調査区遠景 (航空写真)



大田屋窯跡 1 号窯完掘

#### 巻頭カラー2



大田屋窯跡 1 号窯焼成 室断ち割り状況①



大田屋窯跡 1 号窯焼成 室断ち割り状況②



大田屋窯跡物原5断面

国土交通省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地方を目指して、くらしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形状にも配慮しつつ、道路整備を進めているところであります。

一般国道9号は、山陰地方の諸都市を東西に結ぶ唯一の主要幹線道路ですが、 近年の交通量増加や都市部の市街化に伴い、都市間の円滑な連携や生活環境の確 保が困難となってきたため、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会 の発展に資する事を目的に、江津市嘉久志町〜浜田市高佐町において、江津道路 の事業を進めています。

この道路事業は、一般国道 9 号のバイパスを当面、山陰自動車道の機能を併せ 持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあ ります。

更に、過疎化が進み、若者の流出に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路の事業においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や市教育委員会のご協力のもと、江津道路は平成3年度から発掘調査を実施してきております。

本報告書は平成8年度に実施した「大田屋窯跡」の調査結果をまとめたものであります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために 広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進めら れていることへのご理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた 島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成14年10月

国土交通省中国地方整備局浜田工事事務所 所 長 吉 村 伸 幸

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局(現国土交通省中国地方整備局)の委託を受けて、平成4年度から一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりましたが、このたび7冊目となる報告書を刊行する運びとなりました。

本書は、平成8年度に調査を行った石見焼生産遺跡である大田屋窯跡の調査成果をまとめたものです。「石見焼」は、石見地方を中心に江戸時代の終わり頃から昭和30年代にかけて盛んに生産され、販路を広げ、全国的に消費されるにまで発展した焼き物です。特に独特の色あいをもつ赤瓦と「ハンド」と呼ばれる大甕は広く好まれています。このうち赤瓦は、現在でも石見地方の景観を形成する要素の一つとして石見の風土にとけ込んでいます。

今回の調査では、幕末から昭和にかけて使用された連房式登り窯跡と製作関連 遺構が発見され、当時の石見焼の隆盛を垣間見ることができました。

本書が、現在も地域の重要な地場産業である石見焼の歴史や、埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり地元の方々をはじめ国 土交通省浜田工事事務所ならびに浜田市・江津市教育委員会に御支援・御協力を いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成14年10月

島根県教育委員会 教育長 広 沢 卓 嗣

# 例 言

- 1 本書は、建設省中国地方建設局(当時)の委託を受けて島根県教育委員会が平成8年度に実施 した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 本書で扱う遺跡は、島根県江津市波子町口118-1外 所在 大田屋窯跡 である。
- 3 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会

平成8年度 現地調査

事務局 勝部 昭(島根県教育庁文化財課課長)、宍道正年(埋蔵文化財調査センター長)

調査員 大庭俊次(埋蔵文化財調査センター文化財保護主事)、守岡利栄(同主事)、石倉敬子(同教諭(兼)文化財保護主事)、伊藤善太郎(同講師(兼)主事)、梅木茂雄(同臨時職員)、野津旭(同臨時職員)、白澤俊也(三隅町教委より研修)

平成14年度 報告書作成

事務局 宍道正年(教育庁埋蔵文化財調査センター所長)

調查員 守岡利栄(同文化財保護主事)、浅野哲(同教諭(兼)文化財保護主事)

4 現地調査にあたっては下記の方々から指導を受けた(五十音順、敬称略、役職名は当時) 大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長)

関口廣次 (青山学院大学文学部講師)

- 5 発掘作業業務(発掘作業員雇用等)は、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、(社)中 国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託し た。
- 6 現地調査及び資料整理に際しては、調査指導者の他以下の方々から有益な御指導・御助言・御 協力をいただいた。(五十音順、敬称略、役職は当時)

青木修(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター)、嶋田春男(嶋田窯業所)、服部郁(瀬戸市教育 委員会文化財課)、藤澤良祐(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター)

- 7 挿図で使用した方位は、測量法による第Ⅲ座標系のX軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。
- 8 本書で使用した図の内、第1図・第2図は国土地理院発行のものを、第3図は建設省浜田工事 事務所作成のものを、第8図は(株)アジア航測が作成したものを一部改編して使用している。
- 9 本書に掲載した遺物の実測は調査員の他、下記の者が行った。 持田和男 (教育庁埋蔵文化財調査センター教諭 (兼) 文化財保護主事)、阿部智子 (同臨時職員)
- 10 本書に掲載した遺物の写真撮影は守岡と浅野が行った。
- 11 本書の執筆は第2章を浅野が、その他の執筆及び編集を守岡が行った。
- 12 本書掲載の遺物、実測図、写真等の資料は、島根県松江市打出町33 島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 本 文 目 次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	位置と歴史的環境	2
第3章	調査の結果	
	1節 発掘調査の経過と概要	7
	2節 東側斜面調査区	10
	(1) 調査前の状況と概要	10
	(2) 1号窯	10
	(3)物原について	18
	(4) 平坦面について	21
	3 節 尾根上調査区	40
	(1) 道状遺構について	40
	(2) 池状遺構について	40
	(3) 段状遺構について	40
第4章	ま と め	43
	表目次	
	表目次	
第1表	江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘遺跡一覧	1
第2表	大田屋窯跡周辺の窯業関連遺跡	6
第3表	大田屋窯跡計測値	15
第4表	大田屋窯跡出土遺物観察表 (1)	45
第5表	大田屋窯跡出土遺物観察表 (2)	46
第6表	大田屋窯跡出土遺物観察表 (3)	47
第7表	大田屋窯跡出土遺物観察表<写真のみ掲載> (4)	47
	挿 図 目 次	
第1図	大田屋窯跡の位置と周辺の遺跡 S = 1 / 80000 ·······························	3
第2図	大田屋窯跡周辺の窯業関連遺跡 S = 1 / 40000 ·······	5
第3図	大田屋窯跡周辺の地形S=1/2000	
第4図	大田屋窯跡トレンチ調査と調査区の配置 S = 1 / 2000 ································	9
第5図	大田屋窯跡物原の範囲と堆積状況確認の土層ライン設定 S = 1 / 300	
第6図	調査前 1 号窯 · 2 号窯地形測量図 S = 1 / 400 ·································	
第7図	大田屋窯跡東側調査区遺構配置図 S = 1 / 300 ·································	
第8図	大田屋窯跡 1 号窯平面図・立面図・横断面土層図 S = 1 / 120	

第9図	大田屋窯跡 $1$ 号窯縦断面土層図 $S = 1 / 120$ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	15
第10図	大田屋窯跡 $1$ 号窯出土遺物 ① $S = 1 / 3$ ··································	16
第11図	大田屋窯跡 1 号窯出土遺物② S = 1 $/$ 3 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	17
第12図	大田屋窯跡物原 $A-A$ ' ライン土層断面図 $S=1$ $/80$	19
第13図	大田屋窯跡物原 $A-A$ ' ライン土層断面拡大図 $S=1$ $\angle 50$	20
第14図	大田屋窯跡物原 $5$ 出土遺物実測図① $S=1 / 5$ ··································	21
第15図	大田屋窯跡物原 $5$ 出土遺物実測図② $S=1/5$ ····································	22
第16図	大田屋窯跡物原 $5$ 出土遺物実測図③ $S=1/5$ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	23
第17図	大田屋窯跡物原 6 D - D' ライン土層断面図 S = 1 $\angle$ 80 ···································	24
第18図	大田屋窯跡物原 $2 \sim 3$ C $-$ C' ライン土層断面図 S $= 1$ $/$ 50 ···································	25
第19図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図① $S=1/3$ ····································	26
第20図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図② $S=1/3$ ····································	27
第21図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図③ $S=1/3$ ····································	28
第22図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図 $4S = 1/3$ ····································	29
第23図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑤ $S=1/3$ ····································	30
第24図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑥ $S=1/3$ ····································	31
第25図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑦S=1/3 ·······	32
第26図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑧S=1/5 ······	33
第27図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑨S=1/3 ······	34
第28図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図	35
第29図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図	36
第30図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図 $ ② S = 1 / 3 $	37
第31図	大田屋窯跡平坦面第 $1$ 遺構面遺構配置図 $S = 1 / 150$ ·······	38
第32図	大田屋窯跡平坦面第 $2$ 遺構面遺構配置図 $S = 1 / 150$ ·······	
第33図	大田屋窯跡建物跡出土遺物実測図S=1/3	
第34図	大田屋窯跡尾根上調査区遺構配置図S=1/200 ······	
第35図	大田屋窯跡池状遺構実測図 S = 1 / 80 ·····	
第36図	大田屋窯跡池状遺構出土遺物実測図S=1/3	• 42
	写真図版目次	
巻頭カ	ラー1 大田屋窯跡調査区遠景(航空写真)	
	大田屋窯跡 1 号窯完掘	
巻頭カ	ラー2 大田屋窯跡1号窯焼成室断ち割り状況①	
	大田屋窯跡1号窯焼成室断ち割り状況②	
	大田屋窯跡物原 5 断面	
P L 1	大田屋窯跡東側斜面調査区調査前近景(南から)	

大田屋窯跡物原 2 ~ 4 調査前近景 (東から)

	大田屋窯跡 1 号窯調査前近景	(東から)
P L 2	大田屋窯跡1号窯完掘	(東から)
	大田屋窯跡1号窯完掘	(北から)
	大田屋窯跡1号窯完掘	(南から)
P L 3	大田屋窯跡1号窯溝状遺構断面	(東から)
	大田屋窯跡1号窯大口焚き口部分	(東から)
	大田屋窯跡1号窯大口排水施設	(上から)
P L 4	大田屋窯跡平坦面完掘	(南東から)
	大田屋窯跡物原2堆積状況	
	大田屋窯跡物原2堆積状況	
P L 5	大田屋窯跡平坦面1面完掘状況	(北から)
	大田屋窯跡A-A'ライン土層堆積状	況①
	大田屋窯跡C-С'ライン土層堆積状	況②
P L 6	大田屋窯跡平坦面窯道具集積土坑	
	大田屋窯跡平坦面1陶器集積状況	
	大田屋窯跡平坦面2面建物跡検出状況	
P L 7	大田屋窯跡物原6堆積状況	
	大田屋窯跡尾根上調査区道状遺構検出	状況
	大田屋窯跡尾根上調査区加工段状遺構	(西から)
P L 8	大田屋窯跡尾根上調査区池状遺構完掘	
	大田屋窯跡 2 号窯	
	大田屋窯跡 2 号窯	
P L 9	大田屋窯跡出土遺物	
P L 10	大田屋窯跡出土遺物	
P L 11	大田屋窯跡出土遺物	
P L 12	大田屋窯跡出土遺物	
P L 13	大田屋窯跡出土遺物	
P L 14	大田屋窯跡出土遺物	
P L 15	大田屋窯跡出土遺物	
P L 16	大田屋窯跡出土遺物	
P L 17	大田屋窯跡出土遺物	
P L 18	大田屋窯跡出土遺物	
P L 19	大田屋窯跡出土遺物	
P L 20	大田屋窯跡出土遺物(写真のみ掲載)	
P L 21	大田屋窯跡出土遺物(写真のみ掲載)	
P L 22	大田屋窯跡出土遺物(写真のみ掲載)	
P L 23	大田屋窯跡出土遺物	

## 第1章 調査に至る経緯

一般国道 9 号江津道路は、国道 9 号線の交通渋滞緩和と石見地域の高速交通網の整備を目的として建設省(現国土交通省)により、4 車線の自動車専用道路として建設が計画された。起点は江津市渡津町、終点は浜田市浜田自動車道浜田インターチェンジである。

江津道路建設の計画を受け、島根県教育委員会文化課(以下文化課)は、平成元年に江津市嘉久 志町から敬川町までの分布調査を実施し、13か所の遺跡の存在を確認している。平成3年1月には、建設省浜田工事事務所・県土木部・文化課・江津市教育委員会の4者が協議を行い、発掘調査について具体的な検討がなされた。その結果、平成3年度には建設省の委託を受けた江津市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、同7月に江津市二宮町半田浜西遺跡、翌平成4年1月に同都野津町のカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われた。これらの遺跡の調査後、建設省浜田工事事務所・江津市教育委員会・文化課で再度協議を行い、平成4年度から文化課(後に文化財課に改編改称)が本格的に発掘調査に入ることとなった。

平成4年度には鹿伏山遺跡、半田浜西遺跡、平成5年度には江津市嘉久志町の久本奥窯跡、同二宮町の二宮C遺跡、同敬川町の古八幡付近遺跡、カワラケ免遺跡、平成6年には江津市嘉久志町の嘉久志遺跡、同二宮町の飯田C遺跡、古八幡遺跡の発掘調査を行った。一年おいて平成8年度には江津市二宮町の恵良遺跡、同波子町の大田屋窯跡(本書報告)、平成9年度江津市二宮町の神主城跡、飯田A遺跡、古八幡付近遺跡、敬川町の横路古墓、平成10年度は江津市敬川町室崎商店裏遺跡、古八幡遺跡、浜田市上府町の長東坊師窯跡、平成11年度は江津市波子町の堂々炭窯跡、浜田市上府町の上条遺跡、水戸(三戸)神社跡、上府八反原窯跡、平成12年度は立女遺跡の発掘調査を行った。なお、平成9年9月に予定ルートの変更に伴う遺跡の分布調査の依頼を受け、12月から3月にかけて再度の分布調査を実施し、新たに8か所で遺跡の存在を確認した。このうち2か所については平成10年度に再度検討した結果、本発掘調査を行う遺跡から除外している。

第1表 江津道路建設予定地內埋蔵文化財発掘遺跡一覧(2002.10現在)

遺跡名	遺跡の内容	報告事等
半田浜西遺跡	弥生~中世の集落跡	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I
鹿伏山遺跡	縄文土器片など出土	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I
二宮C遺跡	弥生時代後期、古墳時代中期、中世の集落跡	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I
久 本 奥 窯 跡	7世紀後半から8世紀後半須恵器窯跡等	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I
古八幡付近遺跡	弥生時代集落跡、古墳時代後期横穴式石室、縄文時代~近世に至る複合遺跡	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
嘉久志遺跡	径塚ほか	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
飯田C遺跡	散布地	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
恵 良 遺 跡	古代末~中世の集落跡	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV
大田屋窯跡	石見焼生産遺跡	本書
神主城跡	中世山城	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
飯田A遺跡	石見焼生産遺跡	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V
横路古墳	古墳時代後期集落跡、近世集落跡・土坑墓	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
室崎商店裏遺跡	古墳時代後期横穴式石室	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
長東坊師窯跡	石見焼生産遺跡	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V
堂々炭窯跡	近世後半~末炭窯跡	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV
上條遺跡	柱穴群、白磁	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV
水戸(三戸)神社跡	古道、時期不明の段状遺構	一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ
上府八反原窯跡	石見焼生産遺跡	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 VI
立女遺跡	土坑、ピットなど	一般国道 9 号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV
先打井畑遺跡I区		未調査
先打井畑遺跡Ⅱ区		未調査
先打井畑遺跡Ⅲ区		未調査
大尾谷遺跡		未調査

## 第2章 位置と歴史的環境

島根県中央部に位置する江津市は、市域のほぼ中央を、中国山地に源を発する"中国太郎"の呼び名で有名な江の川が流れ、北の日本海へ注いでいる。

大田屋窯跡(第1図中のA、及び第2図中のA)は、江津市中心部から約8キロ西にある波子町の大平山丘陵地の後背に位置し、島根県西部の中心地であり、かつての石見国府が置かれていたと考えられている\*1浜田市と隣接している。

以下、大田屋窯跡遺跡周辺で確認された主要な遺跡と石見焼についても紹介する。

縄文時代の遺跡では、縄文時代中期の地域的な土器形式として「波子式」が設定された県下でも有名な大平山遺跡群(第1図の遺跡番号の1、以下同じ)や鹿伏山遺跡(2)、古八幡付近遺跡(3)など数か所が知られている。

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べると数が増加し、代表的な集落遺跡としては、古八幡付近遺跡、伊甘神社脇遺跡(4)が挙げられる。これらの遺跡では弥生時代全般の遺物が出土しており、古八幡付近遺跡では中期の居住域や環壕等が検出された。都治町の高津遺跡では弥生時代後期から古墳時代中期の集落遺跡が確認され\*2、江の川東岸の砂丘地には後期の列石墓として知られる波来浜遺跡がある。また、下府川上流の谷間に位置する上条遺跡では扁平紐式銅鐸が2個出土したと伝えられており、これは日本における銅鐸分布の最西端の例である。

古墳時代の集落は、二宮C遺跡 (5)、横路古墓 (6) などが江津市内でわずかに知られる程度である。古墳に関しては、確実に前・中期と思われる古墳は確認されておらず、江津市の高野山古墳群 (7)、古八幡付近古墳群、浜田市の片山古墳 (8) など横穴式石室をもつ後期古墳がほとんどである。

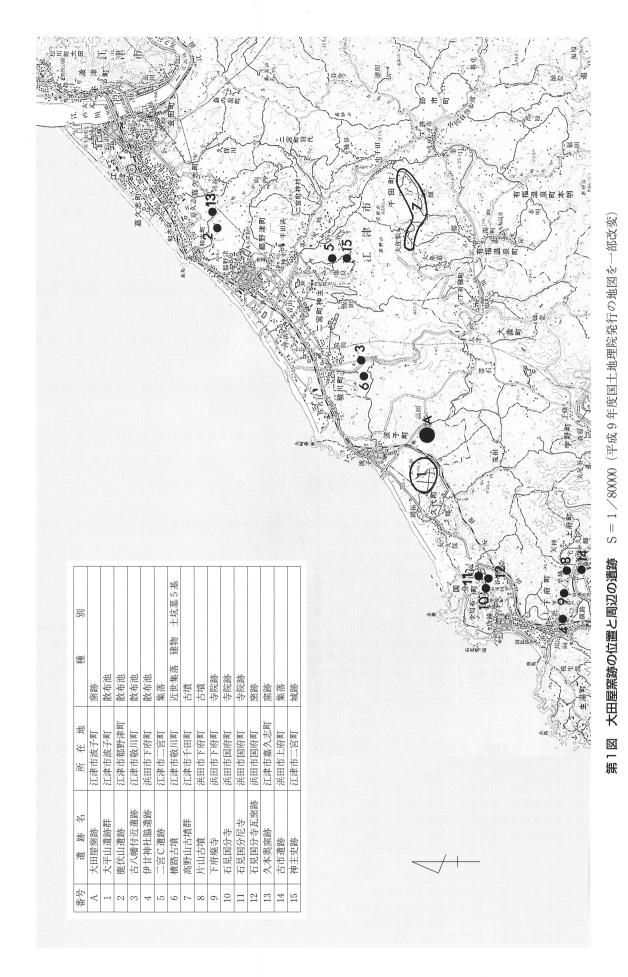
古代になると波子に隣接する下府川下流域には石見国府が置かれたと考えられている。石見国府の所在はまだ確定されていないが、下府廃寺(9)や石見国分寺(10)・同国分尼寺(11)が所在するなど地域の中心として栄えた様子がうかがえる。また、石見国分寺瓦窯 跡(12)では瓦が、江津市嘉久志町にある久本奥窯跡(13)では瓦や須恵器が生産されていた。

中世になると、浜田市下府川流域では、古代の国府は新たに「府中」として発展し、南北朝時代まで栄えたと考えられている\*\*3。代表的な遺跡として古市遺跡(14)や横路遺跡が知られる。城跡では笹山城跡、八反原城跡が挙げられる。またこの地域には、伊甘山安国寺、伝御神本(益田)氏三代の墓、臼口大明神、上府八幡宮が所在し、地域の中心として栄えていた一端がうかがえる。

江津市西部は国人領主である都野氏が支配し、戦国末期に江の川西岸の郷田に移すまで、二宮町に拠点が置かれていたと思われる\*4。代表的な集落遺跡として二宮C遺跡が挙げられ、城跡としては都野氏の神主城跡(15)のほか、福屋氏の拠点である本明城跡がある。

近世になると、この地域は浜田藩領となる。浜田藩は中国地方の押さえとして幕府に重視され、 交通の要地として栄えた。江戸時代に整備された西廻航路や北前船の航路沿いに位置する地の利も あり\*5、江戸時代の末期から明治・大正、昭和30年代頃にかけて多くの石見焼が生産され、日本各 地に伝えられた。

石見焼窯跡は、これまでに江津市西部では田室窯跡、三浦窯跡、飯田A遺跡が、浜田市東部では



- 3 -

長東坊師窯跡、上府八反原窯跡(調査時は佐々木窯跡)が発掘調査されている。

#### 石見焼について

石見焼とは、近世以降石見地方で生産された粗陶器・瓦などを総称していう。石見地方では、都野津層\*\*6といわれる良質の粘土が海岸線に沿って大量に分布している。この陶土層が、特に江津市では海岸から1キロと離れていない標高50メートルから70メートルの丘陵緩傾斜地に豊富に埋蔵されている。原料も製品もすべてが重量品となる窯業が発展するのに、この地は最適であったものと思われる。良質の粘土や港に近い交通の便利な傾斜地に連房式登り窯が数多く作られて操業していた。これらの窯跡の位置は、第2図に示してある。

江戸時代寛政期ごろから江津の波子村、嘉久志村、浜田外浦などに登り窯が築かれたとされる。 石見焼の職人たちは、他地域の陶器と競合しないような大型の甕や壺などの容器や、擂鉢・捏鉢・ 片口などの炊事用の粗陶器製作の技術を磨き、石見焼の名は次第に全国に広まっていった。特に、 水をためておく大型の甕は"はんど"とよばれ、石見の赤瓦、いわゆる"石州瓦"とともに石見焼 を代表する物であった。

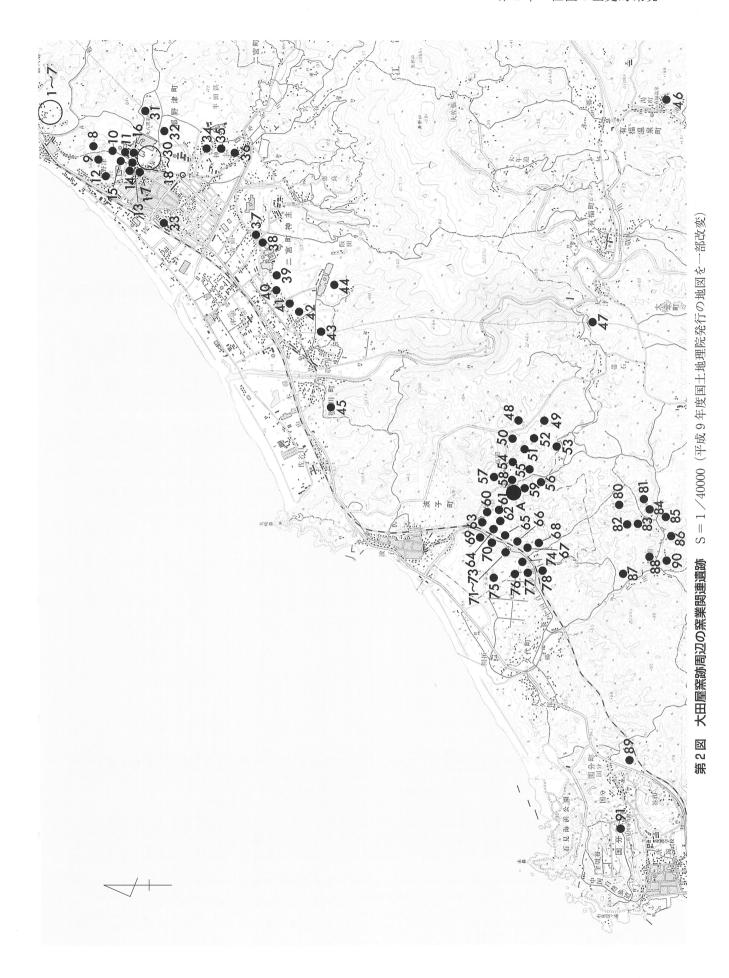
このような石見焼の隆盛には2つの段階があるといわれる。1つは江戸後期の北前船の就航であり、2つは明治中期から大正期の国道・鉄道の貫通による販路拡張であったといわれている。

戦後は化学製品による容器革命と上水道普及によって石見焼は大きな打撃を受けた。さらに、燃料革命によって岐路に立たされて独特の登り窯は姿を消したが、伝統的技術を生かした手作り民芸陶器と、オートメーション化した石州瓦の大量生産に活路を求めている\*7。

- 註 ※1 島根県教育委員会 『石見国府推定調査報告Ⅰ』1978 島根県教育委員会『石見国府推定調査報告Ⅱ』1979 島根県教育委員会 『石見国府推定調査報告Ⅲ』1980による。
  - ※2 江津市教育委員会 梅木茂雄氏の御教示による。
  - ※3 浜田市誌編纂委員会 『浜田市誌 上巻』「第3章 中世の浜田」1973による。 島根県教育委員会 浜田市教育委員会 『古市遺跡発掘調査既報』1995による。 浜田市教育委員会 『横路遺跡』1997による。
  - ※4 江津市誌編纂委員会 『江津市誌 上巻』「第4章 中世後期の石央情勢」1982による。 建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会 『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』 1995による。建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会 『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路 古墓 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』2000による。
  - ※5 島根県教育委員会 『島根県歴史の道調査報告書第7集』1998年による。
  - ※6 山陰中央新報社 『島根県大百科事典 下巻』「都野津層」1982による。
  - ※7 山陰中央新報社 『島根県大百科事典 上巻』「石見焼」1982による。

#### 参考文献

- ·建設省浜田工事事務所 · 島根県教育委員会 『嘉久志遺跡 · 飯田 C 遺跡 · 古八幡付近遺跡 一般国道 9 号江津道路建設 予定地内埋蔵文化財調査報告書  $\Pi$  』 1997
- ・国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会 『恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸(三戸)神社跡(上条古墳)・立女遺跡 一般国道 9 号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 IV 』 2001
- ・国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会 『石見焼関連遺跡調査報告1 (飯田A遺跡・長東坊師窯跡) 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 V 』2001
- ・国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会 『石見焼関連遺跡調査報告2上府八反原窯跡(佐々木窯跡) 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 VI 』2001
- ·島根県教育委員会 『島根県遺跡地図II (石見編)』1992
- · 江津市教育委員会 浜田市教育委員会 『大平山遺跡群発掘調査外報』1988
- · 江津市教育委員会 『古八幡付近遺跡』1992
- · 江津市教育委員会 『波来浜遺跡発掘調査報告書』1973
- · 浜田市教育委員会 『浜田市遺跡詳細分布調査 国府地区 I 』 2002
- ·浜田市教育委員会 『下府廃寺跡』1993
- · 浜田市教育委員会 『下府廃寺跡発掘調査概報』1990
- ・松田忠幸 「角の浦今昔 江津の歴史と文化」1997.4.23~9.3 山陰中央新報社



- 5 -

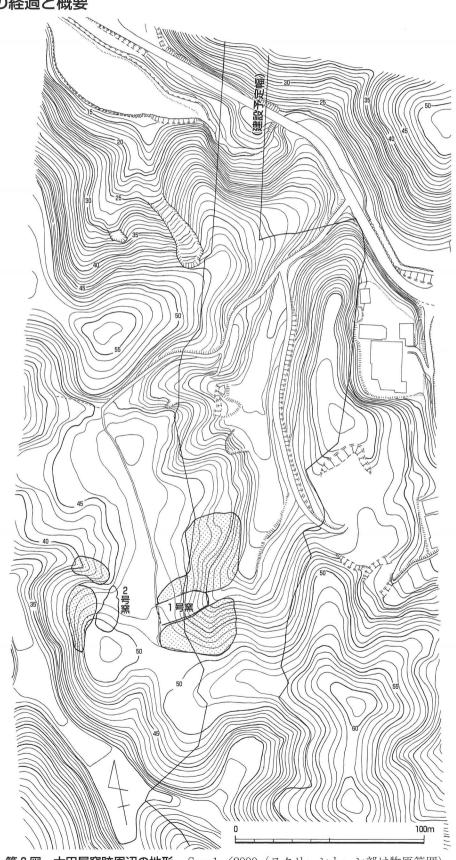
# 第2表 大田屋窯跡周辺の窯業関連遺跡

备为   週 跡 名   所 任 地	1971 X		1		
A 大 田 屋 窯 跡 江津市波子町	丸物窯、作業場、土漉場		46 大 吉 屋 窯 跡 江津市有福温泉町	瓦業	
1 和 木 窯 跡 江津市和木町丸子山	丸物窯	弘化年間創?	47 山 崎 屋 窯 跡 浜田市大金町大峠	大物	
2 尾 川 窯 跡 江津市和木町丸子山	丸物、小物	安政5年尾川某和木窯	48 扇 元 窯 跡 江津市波子町高田	丸物窯	
3 さどや 窯跡 江津市和木町丸子山	九物、瓦		49 安永·和田窯跡 江津市波子町高田	九物窯	
4 立 川 窯 跡 江津市和木町	瓦業		50 よしおき屋窯跡 江津市波子町高田	九物窯	
5 大 島 窯 跡 江津市和木町	大物		51 高 田 屋 窯 跡 江津市波子町高田	丸物窯	
6   くらたや窯跡   江津市和木町丸子山	瓦窯			丸物窯	
	瓦窯		53 飯 田 窯 跡 江津市波子町高田	九物窯	
8 坂 根 窯 跡 江津市都野津町遠見山	瓦窯		54 黒 川 窯 跡 江津市波子町	九物窯	
9 木 村 窯 跡 江津市都野津町遠見山	瓦窯		55 新屋窯跡 江津市波子町高田	九物窯	
10   浜田殖産代3 跡   江津市都野津町赤羽根	1 瓦窯		56   いなばや窯跡   江津市波子町高田	丸物窯	
11 坂 根 窯 跡 江津市都野津町大元山	瓦窯		57 小 中 屋 窯 跡 江津市波子町	九物窯	
12 有 間 窯 跡 江津市都野津町	瓦窯		58 丸物屋窯跡江津市波子町	丸物窯	
13 佐 々 木 窯 跡 江津市都野津町六反田	瓦樂		59 渡津屋窯跡 江津市波子町梅の木		
14 川 崎 屋 窯 跡 江津市都野津町宮の下	九物窯		60 木 島 屋 窯 跡 江津市波子町	九物窯	
	大物		継	丸物窯	
	レンガ		62   いなざわや窯跡   江津市波子町	丸物窯	
17   川 下 窯 跡 江津市都野津町オノ神	瓦窯		63 長 沢 屋 窯 跡 江津市波子町	丸物窯	
18 川 崎 屋 窯 跡 江津市都野津町鳥井迫	瓦窯		64 深野窯跡江津市波子町	丸物窯	
19 有 沢 屋 窯 跡 江津市都野津町行者山	瓦窯		65 山 崎 屋 窯 跡 江津市波子町皿淵	丸物窯	
20 有 福 屋 窯 跡 江津市都野津町行者山	万樂		66 千 代 延 窯 跡 江津市波子町	九物窯	And the second s
21 唐 鐘 屋 窯 跡 江津市都野津町清水	共同窯、瓦窯		67 吉 田 窯 跡 江津市波子町皿淵	丸物窯	
1	瓦窯		68 おきにし屋窯跡 江津市波子町皿淵	丸物窯	
	瓦窯		69 いなもとや窯跡 江津市波子町	九物窯	
24 新 宅 窯 跡 江津市都野津町行者山	国際		70 まつよし屋窯跡 江津市波子町皿淵	九物窯	
25 中 西 窯 跡 江津市都野津町大道	瓦窯		71   磯 野 屋 窯 跡 江津市波子町皿淵	丸物窯	文人年間創
26 今 崎 窯 跡 江津市都野津町六反田	瓦樂		72 和 田 窯 跡 江津市波子町皿淵	丸物窯	
27   加 藤 窯 跡   江津市都野津町六反田	瓦業	砂鉄瓦創始	73 和 田 窯 跡 江津市波子町皿淵	九物窯	
28 中 原 窯 跡 江津市都野津町赤羽根	瓦窯		74 はまの屋窯跡 江津市波子町皿淵		
近重窯跡	九物窯		国 本 窯 跡		
搬			江津市波子町		
竹内窯跡			白 石 窯 跡		寛政3年創
唐 鐘 屋 窯 跡			型 理 型 型		
有間窯跡	7		長東坊師窯跡	2010	発掘調査有り
三 下 窯 跡	1		大金羅聯	丸物、瓦	
富金原窯跡	九物窯	文化年間創	いりしまや窯跡	瓦業	
加藤窯跡	瓦窯		花 屋 窯 跡	九物	
富金原小川共同窯跡 江津市	瓦窯		飯 田 窯 跡	九物	
山藤窯跡	丸物窯、大甕		とうまや窯跡	九物	
	九物窯		※ 量 ※	九物窯	
金原窯跡	九物窯		盤継	丸物	
地器	瓦樂		下土居窯跡	九物	
₩	瓦窯		88 竹の河内窯跡 浜田市上府町荒相	九物	
金原業跡	丸物窯、大甕		茶古田繁郎	須恵器	古代窯本体は消滅か?
崎商店裏遺跡	丸物窯	発掘調査有り窯跡は未調査	中部屋窯跡	九物	
4 特 名 异一字进行	中国	_	01 2 日 取 徐 巽 汽田市田小門田存	古公	

## 第3章 調査の結果

#### 第1節 発掘調査の経過と概要

大田屋窯跡は、江 津市波子町の海岸部 から南へ約1.5km入 り込んだ標高約50m の丘陵地に所在す る。現地は、江津・ 浜田両市にまたがる 石見海浜公園から、 有福温泉で知られる 江津市有福町へと抜 ける県道跡市波子停 車場線からさらに丘 陵地へと入り込んだ 場所にある。谷を隔 ててわずか200m北 側にはJR山陰線が 通じているものの、 現地は深い竹藪、草 木に覆われ、ここ数 年はほとんど人の手 が入っていないこと もあり、かなり荒れ た状態であった。



**第3図 大田屋窯跡周辺の地形** S=1/2000 (スクリーントーン部は物原範囲)

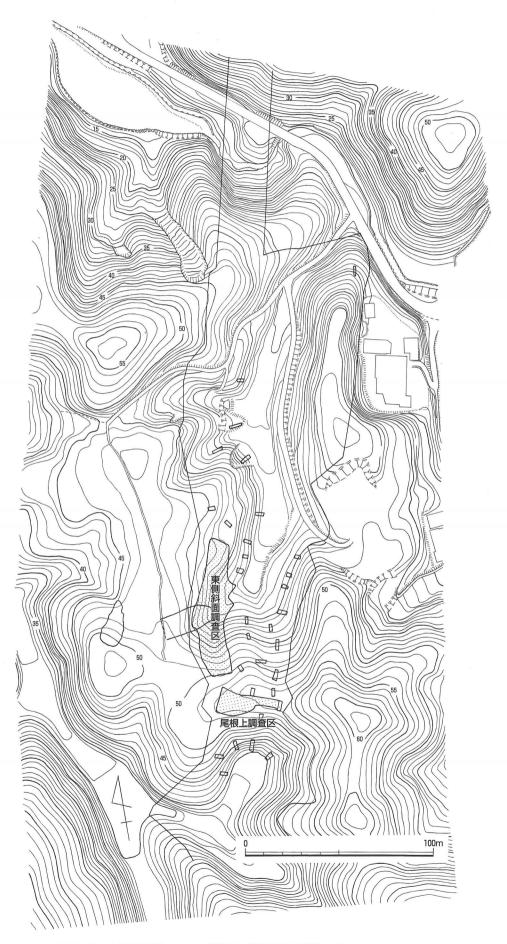
大田屋窯跡は、地元ではその存在とおおよその位置は一部の研究者には知られていたようで、郷土研究誌の『石見潟』第十・第十一号には今回報告する2号窯らしき窯跡が「吉沖屋窯」として紹介されるなどしていた。「大田屋窯跡」という名称は、平成3年に行われた分布調査後につけられた名称であり、どのようないきさつで「大田屋」という屋号を冠したかという資料が残っていないため詳細は不明であるが、関係者によると「一時大田屋という仲買業者が製品を販売したことがあったと聞き、その屋号を名称として採用したのではないか」ということであった。

現地には、道路予定地に約半分がかかっている1号窯跡と、1号窯跡の東の用地外に2号窯跡と合計2基の石見焼登り窯跡が観察でき、その周囲には大量の陶器が投棄され散乱していた。また丘陵上や斜面には平坦面が観察でき、工房や窯に付属する関連施設が存在したことが想定できた。発掘調査に当たっては、遺跡の範囲が当初窯跡を中心にかなり広範囲にわたっていたため、まずトレンチを配し、遺構の有無の確認を行った(第4図)。この結果、1号窯跡の立地する斜面部分を「東側斜面調査区」、この西側にあたる丘陵尾根筋部分を「尾根上調査区」と呼び分け、二調査区で発掘調査を行うこととなった。

発掘調査の結果、東側斜面調査区で石見焼登り窯である1号窯跡と付属施設として製作工房の置かれていたであろう平坦面と建物跡1棟、土坑等を、また尾根上調査区では焼き物用の粘土を精製した池状遺構1と段状遺構1、道路状遺構1を検出した。また多量に陶器が投棄されていた物原出土遺物から、これらの窯跡で焼かれた製品の多くは陶器類であるが、初期には瓦の生産を行っていたことが明らかとなった。そして平坦面から出土した他地域産の磁器から、窯場としての成立が幕末~明治初期に遡り、明治・大正期に最盛期を迎え、昭和10年ごろまで生産を続けていたことが明らかとなった。

なお、発掘調査に合わせて関係者の方々に聞き取りの御協力を得た。これによると調査対象地外の2号窯については昭和10年代頃操業していたことをお教えいただいたが、1号窯については現地権者の方が所有した昭和20年代には既に荒廃しており「窯の存在自体も知らなかった」とのことで詳細について調べることはできなかった。また切図から、字名に「土床」「酌池」「荒物床」など焼き物に関連性のある地名が多々見受けられたことからも周辺が石見焼の窯場であったことがうかがえた。

以下各調査区ごとに詳細を述べる。



第4図 大田屋窯跡トレンチ調査と調査区の配置 S=1/2000

#### 第2節 東側斜面調査区

#### (1)調査前の状況と概要

1号窯は南北に延びる丘陵に挟まれた細い谷の突き当たり、丘陵斜面上に築かれている。調査前の観察では、窯の上部構造は既に壊れていて、その上にはさらに陶器が堆積していた。調査地外にある2号窯は焼成室の壁やアーチ状の天井部といった窯の上部構造が一部現存しており、この遺存状態の違いから、1号窯より2号窯の方が新しいことが想定された。1号窯跡周辺の丘陵斜面には、特に大量の陶器が投棄されており(物原1~6)、1号窯廃窯後も2号窯での操業時の不良製品廃棄がなされたものと思われた。

調査は、斜面の物原に土層観察用のアゼを残して堆積状況を確認しながら、純粋な陶器のみの堆積について一部重機を用いて除去することから開始し、その後1号窯の調査、作業場である平坦面の調査を行った。

この結果、連房式登り窯である1号窯、作業場である平坦面ではそこに建てられた建物跡1棟とピット群、瓦用の窯道具が集積された土坑1や大甕が埋め込まれた製作関連土坑2などを検出した。物原からは甕や壷といった陶器の他に瓦焼成時に使用する窯道具が出土したことからこの窯が陶器と瓦の両者を生産してことが明らかとなった。また「明治三十六年」銘のある陶板が出土したことからもおおよその操業時期が明らかとなった。

#### (2) 1号窯

#### (立地・基礎構造)

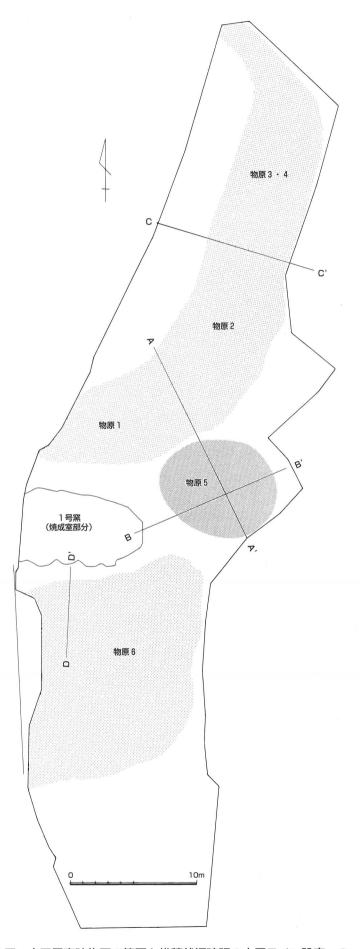
丘陵斜面の自然地形を利用した連房式登り窯である。最も低い位置にある薪の燃焼室である大口の焚き口部は標高36m、窯の後背部分である煙出し部は標高46mであり、自然の丘陵の傾斜を利用しコンターに直交する方向に築かれている。煙出部分は作業場が存在したと思われる広い平坦面と接している。なお、調査区外ではあるが、平坦面の中央には幅2mの道が貫き、これを通ると県道跡市波子停車場線に出ることもでき、製品の荷出しもこのルートで搬出されていったものと思われる。1号窯の北側は、作業スペースを確保するためにか斜面が削平されているが、同南側は、緩やかな傾斜の自然地形を大きく改変することなく窯が築かれている。窯の基礎構造は、斜面を20度の傾斜で削り出した整地面に盛り土を行い整えている。立地が谷水の集まる谷の最奥部ということもあり、薪の燃焼室である大口付近では雨が降ると雨水でぬかるみができるほどで、下部に厚く造成土が盛られ大口下部には暗渠状の排水施設を備えていた。

#### (規 模)

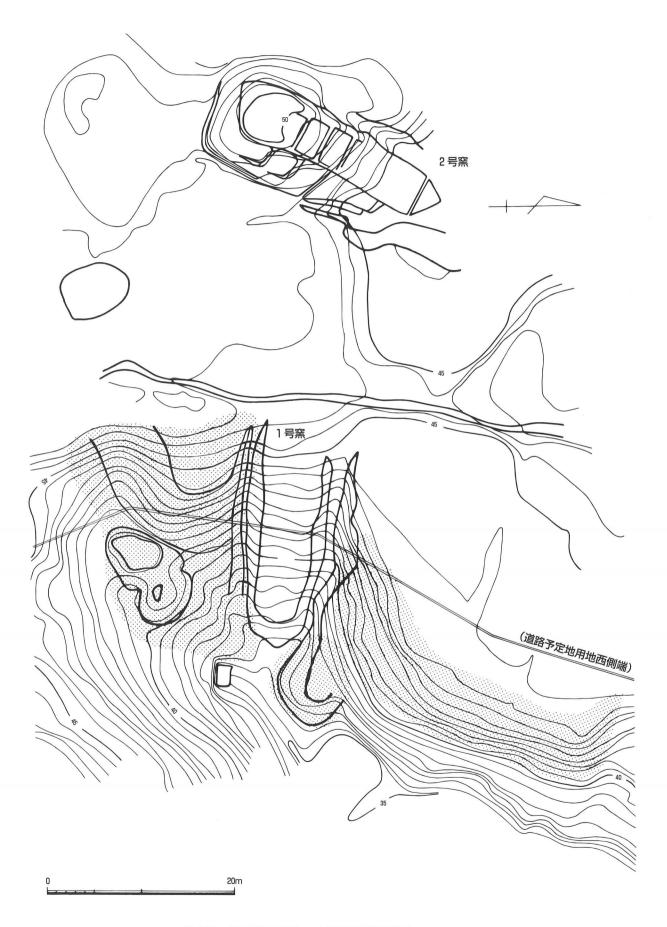
窯体の規模は、発掘調査部分以外を表面観察で補えば、全長約27m前後、最大幅約6.3m、10室前後の焼成室からなると想定される。規模の詳細は第3表の通りである。

#### (築窯材)

主な築窯材は、アゼ・トンバリと呼ばれる耐火煉瓦が用いられている。使用場所によって大小2種のトンバリとより小型のアゼが使い分けられている。使用済みのトンバリ・アゼが窯本体からも周辺の物原からもほとんど出土しないことから廃窯後に持ち出されたのであろう。窯は大口から第1房(寄窯)、第2~4房までが調査区内で第5房以上が調査区外となっている。表面観察から見ると第8房までは確認でき、以上にふかせや煙出しといった施設が付属していたと見られる。煙出しの部分は基礎に高く盛り土を施すものではない。



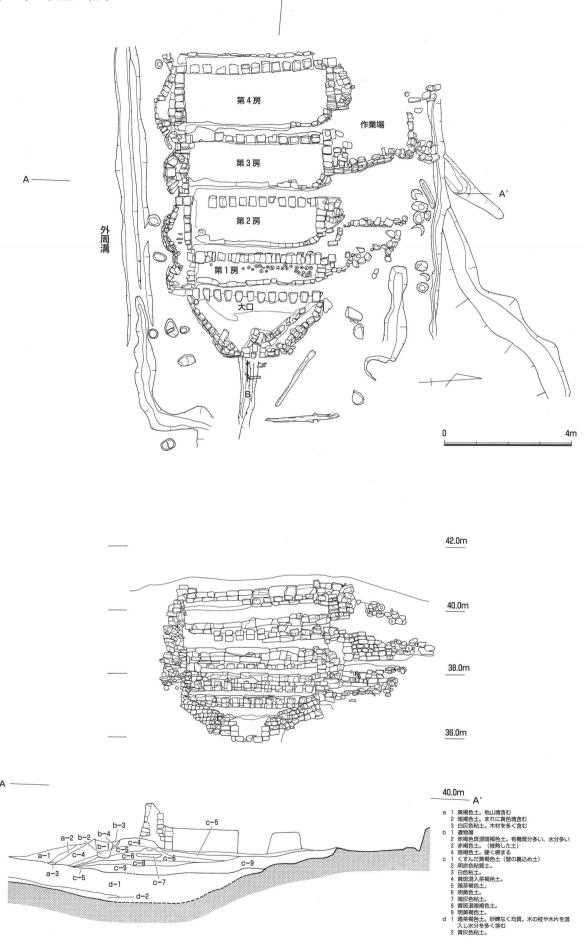
第5図 大田屋窯跡物原の範囲と堆積状況確認の土層ライン設定 S=1/300



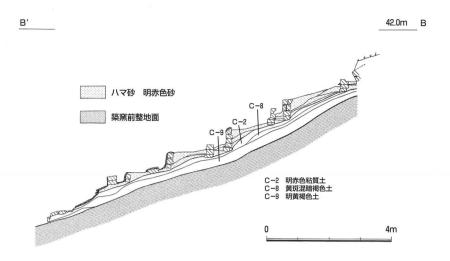
第6図 調査前1号窯・2号窯地形測量図 S = 1/400

第7図 大田屋窯跡東側調査区遺構配置図 S=1/300

<u>X = -11</u>6,380



第8図 大田屋窯跡 1 号窯平面図・立面図・横断面土層図 S=1/120



第 9 図 大田屋窯跡 1 号窯縦断面土層図 S = 1/120 第 3 表 大田屋窯跡計測値

#### 1号窯

		焼成室内法		本体窯壁含む外法最大幅 (m)	
	最大幅 (m)	奥行き (m)	火格子窓数	最大幅 (m)	奥行き (m)
大口部	3.88	1.76	11	4.28	2.08
第1房	3.80	0.92 (うちハマ部0.72)	12	5.40	1.16
第2房	3.96	1.48 (うちハマ部1.28)	12	5.80	1.80
第3房	4.32	1.40 (うちハマ部1.72)	13	5.88	1.96
第4房	<b>4.</b> 52	2.00 (うちハマ部1.84)	13	6.24	2.36
全長 (推定)		本体窯壁含む外法 約 24m			
上屋覆範囲		(幅・大口前庭は外周溝から想定、長さ後背は煙出まで) 長さ 27m、幅 約10.5m			

<sup>※1「</sup>焼成室内法」の「火格子窓数」は、各房と後ろ側の房をつなぐ火格子窓の数(例えば、1房あれば、2房との間をつなぐ

#### 2号窯

全長 (推定)	27 m
最大窯体幅のみ (推定)	6 m

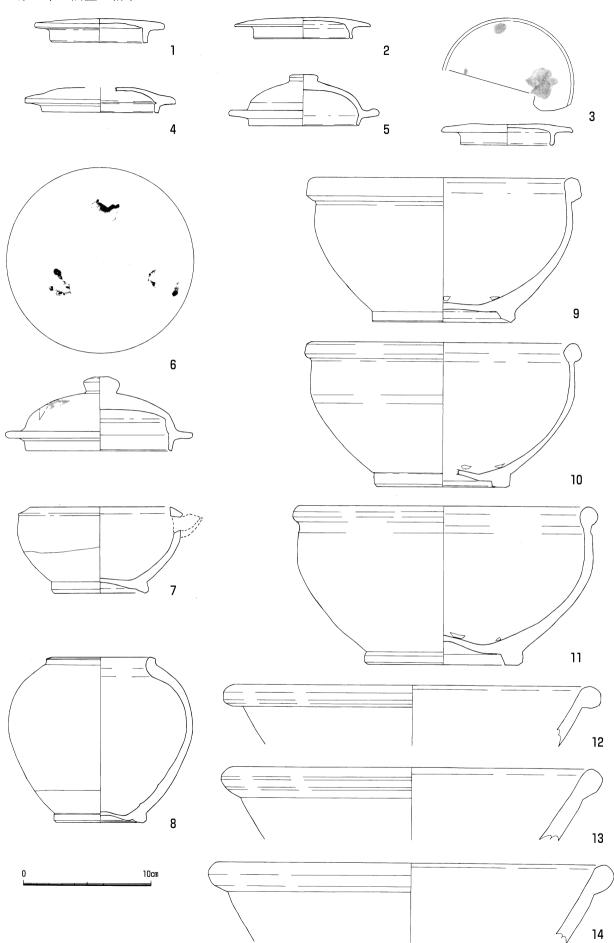
#### (大 口)

薪の燃焼室である。平面形は逆三角形で中央に1か所焚き口がついている。水分がたまりやすい 立地を克服するために窯の床面の下層にヌケと呼ばれる土管状の焼成台をつなげて暗渠排水状の施 設を設けている。このような施設は開窯当時の経営者や築窯師らを考える上で示唆的であろう。

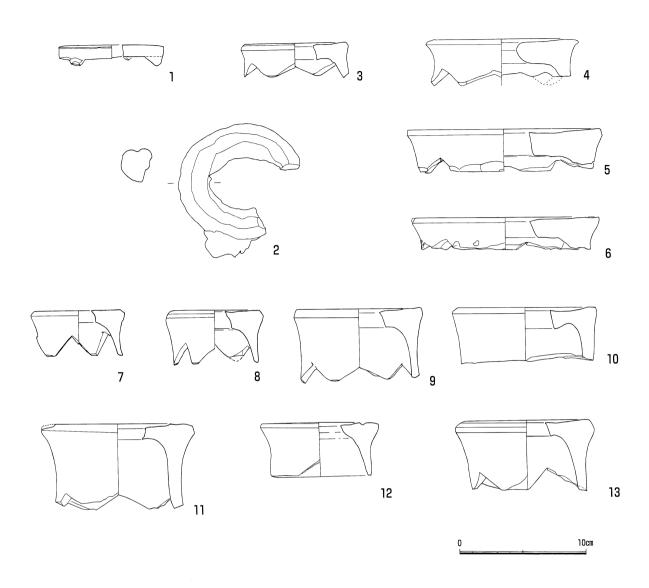
#### (焼成室)

調査区範囲であった第1房から第4房を確認した。床面にはハマと呼ばれる耐火砂が敷かれ、ハ

<sup>※1 「</sup>MDM 全口は」。 (八日 - 2022 窓の数)を指す。 ※2 「本体窯壁含む外法最大幅 (m)」の「奥行き」は、各房と後ろ側の房を区切る壁厚を含む。



第10図 大田屋窯跡 1 号窯出土遺物① S=1 / 3



第11図 大田屋窯跡 1 号窯出土遺物② S = 1 / 3

マは被熱し赤く変色していた。第1房にはハリが原位置に残されていた。

各焼成室の内部は、窯詰め作業時の通路の役割も果たす作業場と同一のレベルの下段部分と、より50cm程高く築かれた製品を並べる「ハマ」と呼ばれる上段部分とに分けられる。各焼成室をつなぐ「火立て」あるいは「火格子」と呼ばれる部分は大・小トンバリが用いられ、各室の熱量が次の室へと伝わる仕組みとなっている。

#### (煙出部)

調査範囲外であるため詳細は不明であるが、隣接する 2 号窯が土やヌケなどの窯道具を多用して基礎に現地表面から 2 m以上も盛土した上に築かれているのに対し、地上部の盛土造成は 1 mに満たないほどである。

#### (作業場)

焼成室の北側には作業場としてのテラス面が造成されている。各焼成室の作業場は北側にのみあり、南側には造られていない。南側は焼成室の保温効果と窯構造を支えるために窯壁が耐火煉瓦と地山粘土で厚く築かれている。

#### (上屋)

窯本体を覆う建物の痕跡として作業場と大口の全面に礎石と柱穴が検出された。

(1号窯出土遺物について) (第10図、写真図版 P L 9, P L 10)

大口付近の炭層から出土したものと、1号窯焼成室にのこされていたハリである。陶器類・ハリとも物原から出土した他の陶器と大差ないものである。

#### (3)物原について

第5~6図に示したとおり、1号窯の周囲の斜面には大量の陶器が廃棄されていた。これを「物原」と呼び、各地点を $1\sim6$ と呼び分けた。物原へは、平坦面での作業後、不要と見なされた陶器が廃棄され、上層は厚さ1 m以上の純粋に陶器のみの層が認められた。この陶器層は、物原6 が最も厚く、厚いところでは陶器層の厚さが3 mに及ぶところもあった。物原 $1\cdot2\cdot3\cdot4\cdot5$  では、物原 $1\sim2$ と5 が陶器層の堆積が厚く、窯本体から離れる物原 $3\cdot4$  では陶器層が薄くなっていた。

上層の陶器層から採集できた遺物は、大半が陶器類で、甕・擂鉢・蓋壷・片口鉢・捏鉢・徳利・ 瓶等といった石見焼に一般的な陶器類の他に飯茶碗や汁碗、皿といった小型品も多数出土している。 この陶器は、1号窯と2号窯の製作不良品の両者が含まれると思われ、これらで焼かれた製品の傾 向をうかがうことができよう。

物原 $1\cdot 2\cdot 3\cdot 4$ では、上層の純粋な陶器層を除去すると平坦面の造成面や建物跡が検出された。

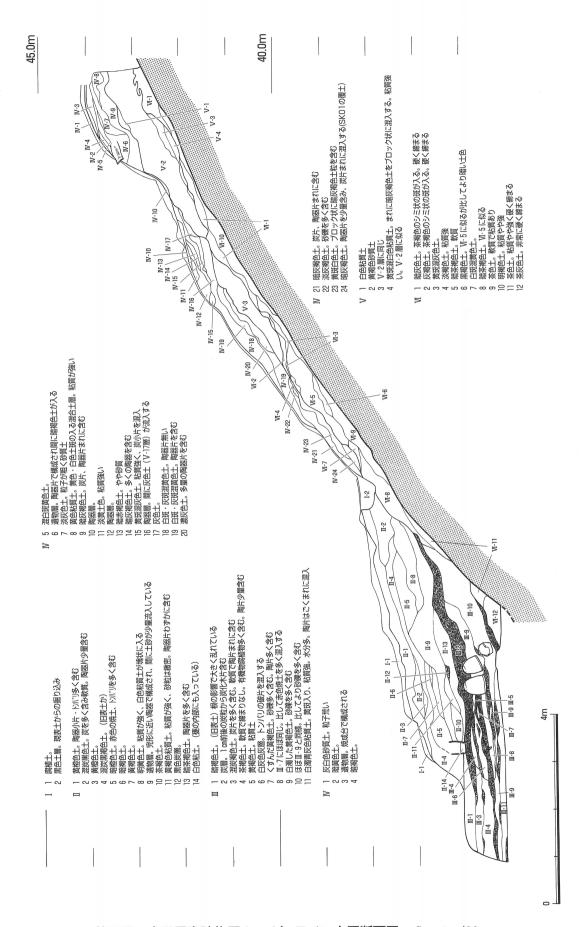
物原 5 は、当初物原  $1 \sim 2$  の一部と認識して上層の陶器層を除去していたが、陶器層の下層から炭を多量に含み 1 号窯大口前面から水平に堆積する層(第12図中  $\square$  層)が認められ、下層が分布する範囲を物原 5 と呼び分けた。物原 5 では完形の大甕(第14~16図)の口縁部を下に伏せたものが 8 個体集積してある以外は陶器は破片であることが多く、この点で上層の陶器層と異なる。また、赤く被熱したハマ砂やトンバリ、桟瓦を多く含む点でも趣を異にしている。物原 5 は 1 号窯大口と連続する層に堆積していることもあり、物原 5 は 1 号窯の操業時の灰原と考えられる。なお、物原 5 からは「明治三十二年」銘のある陶板(第27図 4)が出土しており、1 号窯の操業年代を知る資料である。

物原 6 は、1 号窯の南にある。物原の中では最も陶器層が厚く堆積していたところである。上層の厚い陶器層を除去すると、1 号窯外周溝と連続するレベル以下で堆積状況が大きく異なっており、炭やハマ砂、窯道具を含む堆積が認められた。これも物原 5 と同様に 1 号窯の操業時の堆積と考えられる。ここからは、陶器小片に混じって瓦類や瓦窯詰め用の道具(ハセ)が多数出土しており、物原 5 からも瓦が出土することも合わせると、1 号窯では瓦の焼成も行われたものと思われる。

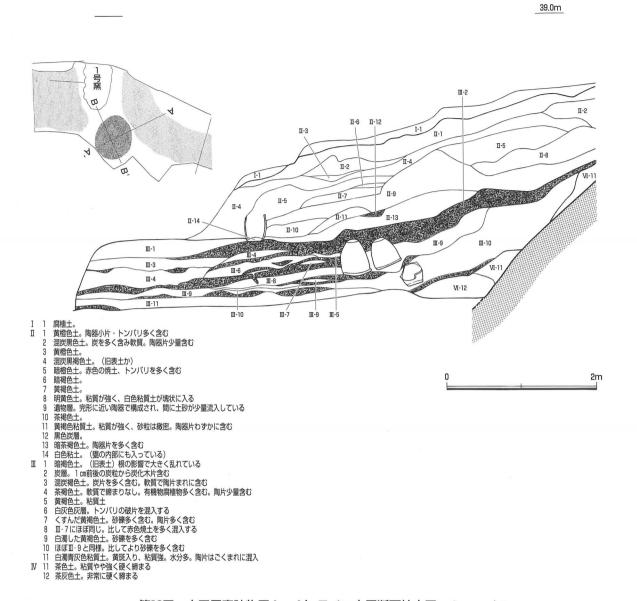
#### **(物原採集遺物)** (第19~30図)

膨大な物原廃棄物には、この窯で生産された陶器類・瓦類、焼成や成型に関連する窯道具、他に 窯場で働く人々が持ち込んだ食器や日用品など、様々なものがあった。

生産陶器・瓦類については、現地においておおよその分類(甕類・擂鉢・片口鉢・捏鉢・壷・



第12図 大田屋窯跡物原A - A' ライン土層断面図 S = 1 / 80



第13図 大田屋窯跡物原A-A'ライン土層断面拡大図 S=1/50

瓶・蓋・その他)を行い、代表的なものを採集した(第19図~27図)。いずれもこれまでに報告されている近代の石見焼製品群から逸脱するものではなく、大型・小型品を問わず来待釉・透明の並釉が用いられる陶器である。この窯の特徴としては、第19図のような皿・碗と言った小型品が一定程度の割合を占めていることであろうか。小型品や壷・蓋には呉須やコバルトで絵や文字が描かれ

ているものが多く見られる。また徳利や瓶には、注文先の店名が描かれたものがある。瓦では、装飾的な鬼瓦や鳥伏間といったものが見受けられ、製作する職人の技術の高さをうかがうことができる。ユニークなものとしてはカエル形や鳥形(?)、来待釉かけされた陶製人形や、海岸部の漁師から注文されたのか陶器製の漁網錘も見られた(写真 P L 21)。甕や盛り鉢の底部には窯印の刻印が押されたものが認められた(写真 P L 18)。

窯詰め道具としては(第29図~30図)陶器焼成台であるハリ、トチン、ヌケ、甕などに使用するハセドロ・ハセツチ、瓦詰め作業時に使用するハセ・モミツチが多く採集された。他に十能、硯、当て具、素焼きの坩堝、盛り鉢などが採集されている。これらの道具はいずれも石見焼と思われ本窯で必要に応じて製作されたものであろう。

持ち込まれた焼き物では、磁器が採集されている(写真 P L 22)。肥前系がほとんどで、瀬戸・ 美濃系は 2 点のみであった。他に焼成窯不明の磁器も見られた。これらの磁器は幕末~明治・大正 期のものである。

#### (4) 平坦面について

丘陵の頂部を削平・盛土して広い平坦面を造り出している。調査区外を含めると幅50m、長さ100mに渡って平坦面が造り出され、その中央に幅約2mの通路が貫き、東側斜面には1号窯が、西側には2号窯が配されている。

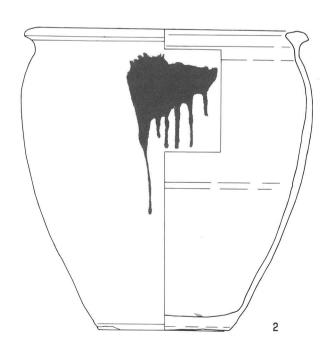
調査では、このうち東側斜面のわずかに一部が対象となった。平坦面は盛土造成や不良製品の廃



0 10cm

第14図 大田屋窯跡物原 5 出土遺物実測図① S = 1 / 5

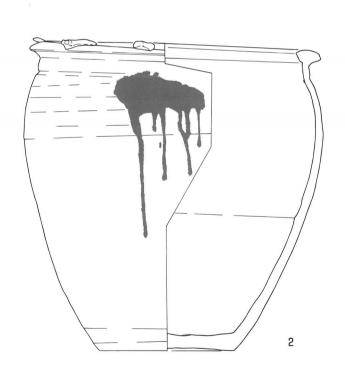




0 10cm

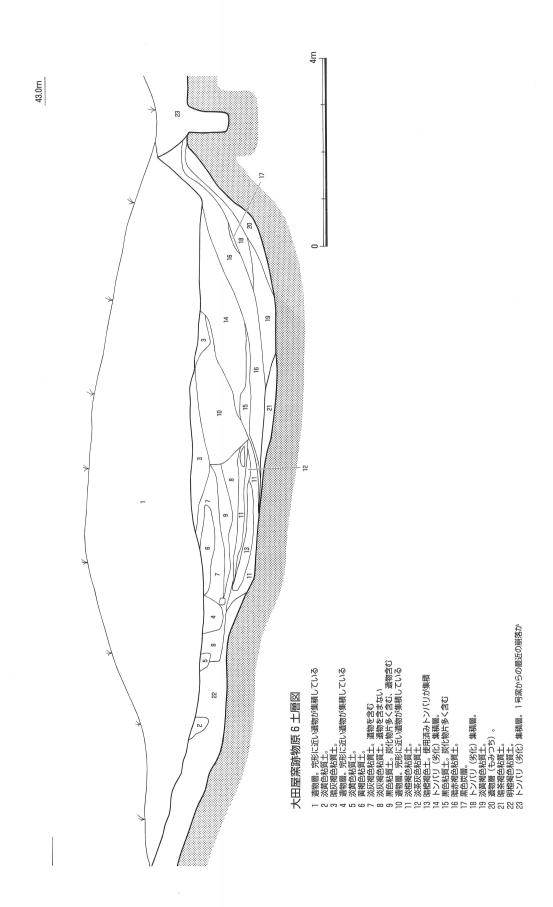
第15図 大田屋窯跡物原 5 出土遺物実測図② S=1/5





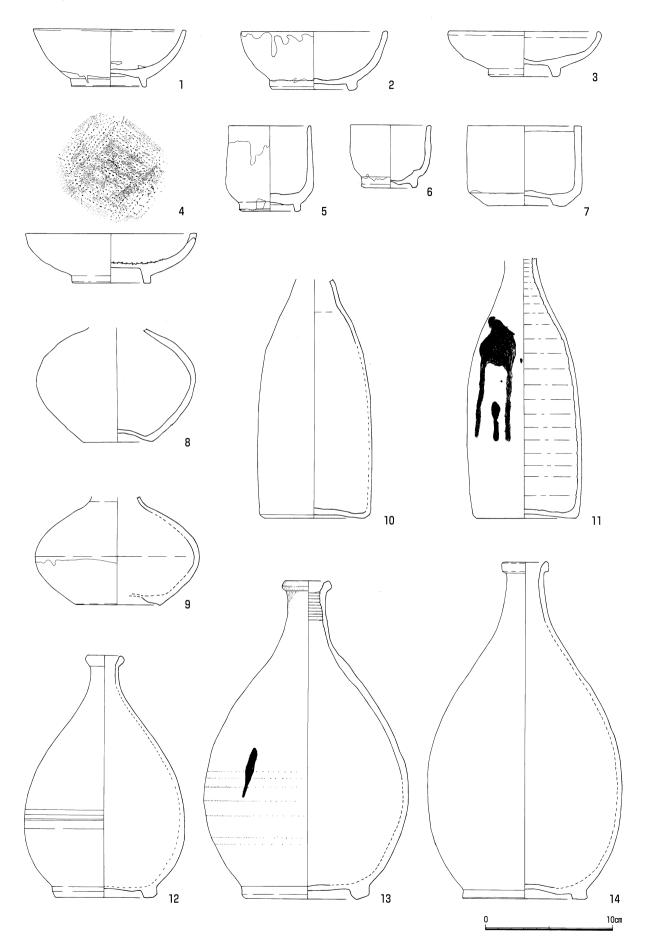
0 10cm

第16図 大田屋窯跡物原 5 出土遺物実測図③ S=1 / 5

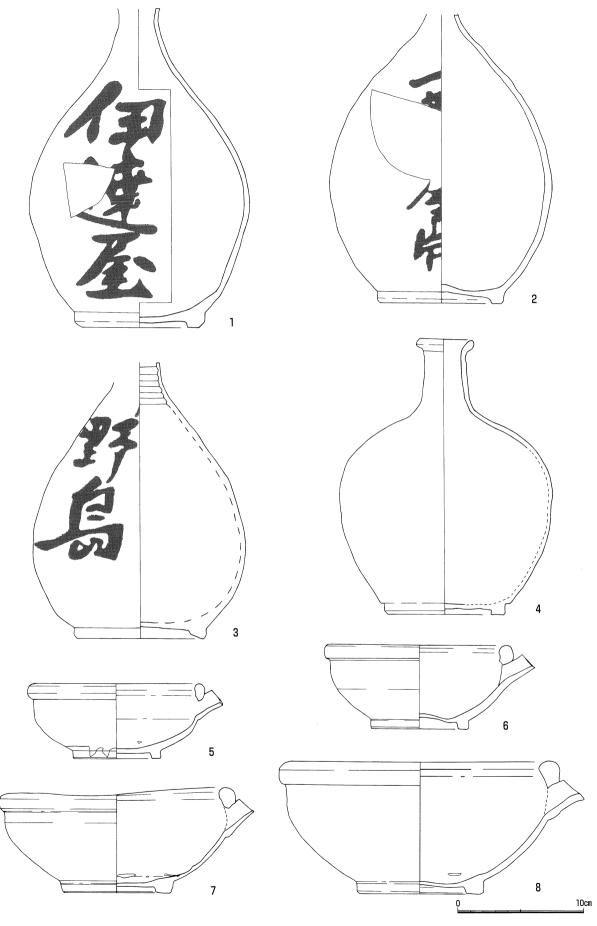


第17図 大田屋窯跡物原 6 D - D' ライン土層断面図 S=1/80

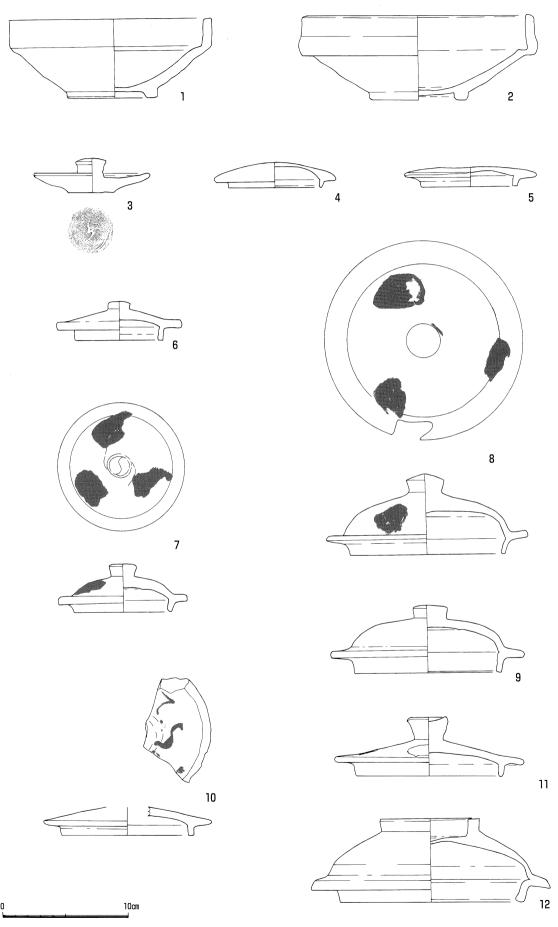
第18図 大田屋窯跡物原 2  $\sim$  3 C - C' ライン土層断面図 S = 1 / 50



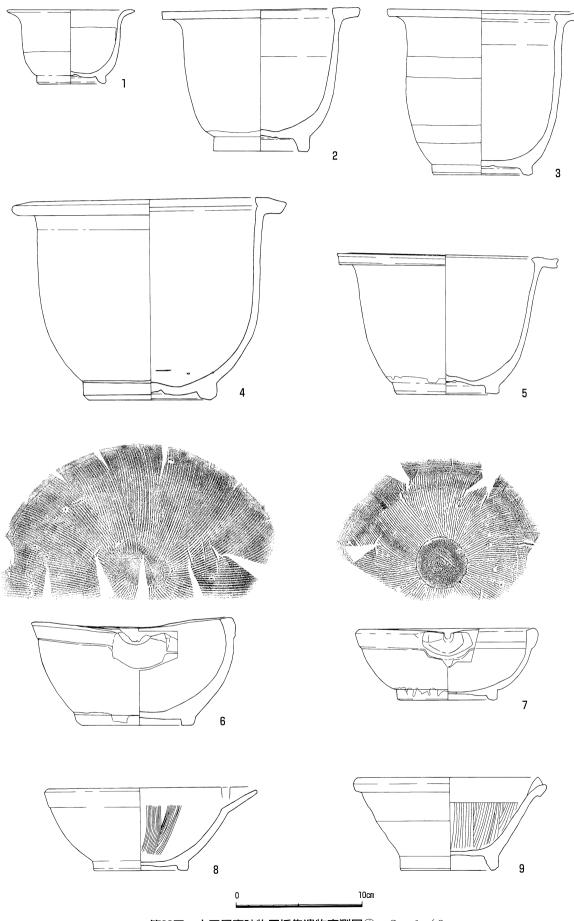
第19図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図① S = 1 / 3



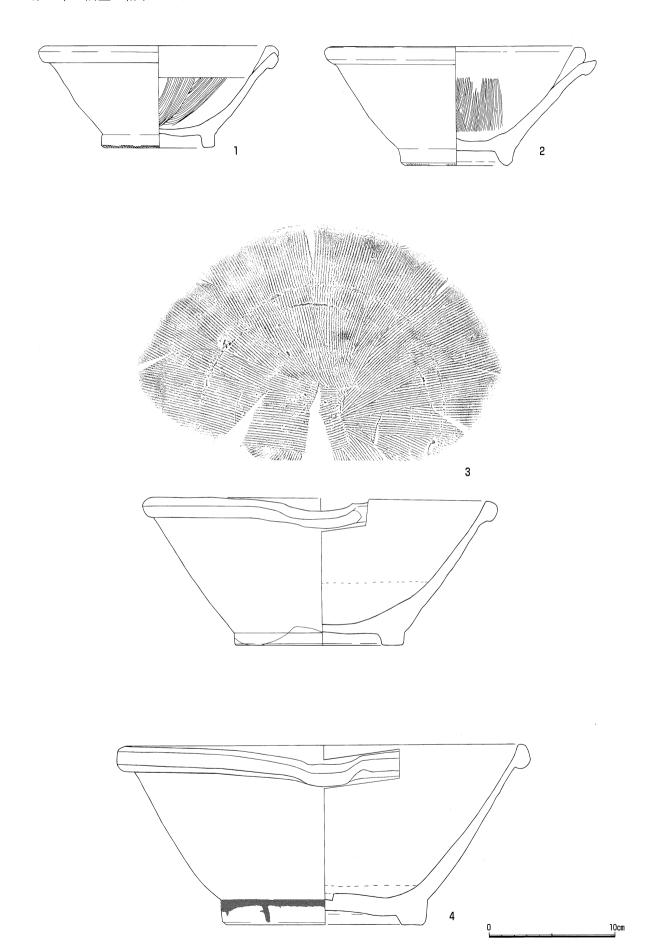
第20図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図②  $S=1 \ / \ 3$ 



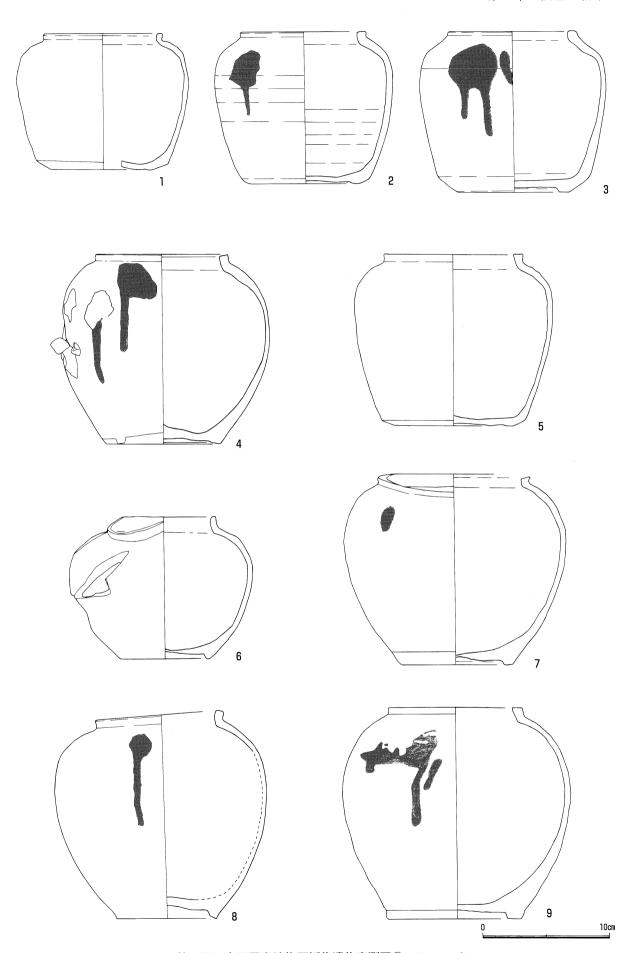
第21図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図③ S = 1 / 3



第22図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図④ S=1/3

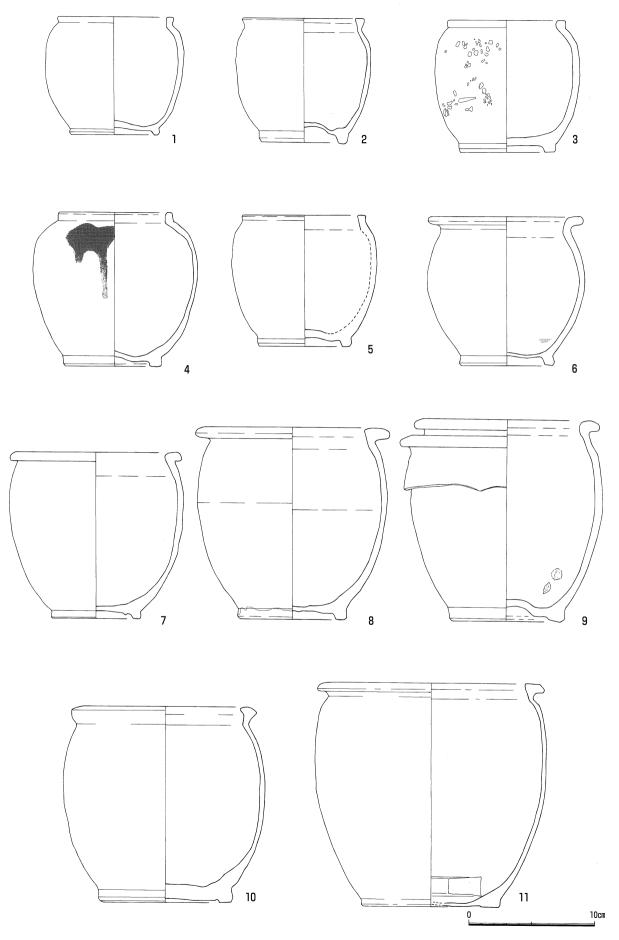


第23図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図 $\S$  S=1/3

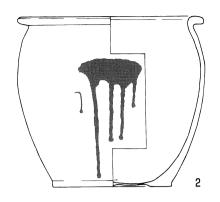


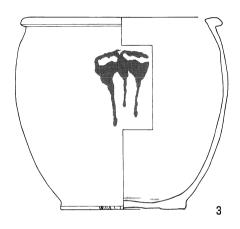
第24図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑥ S=1 / 3

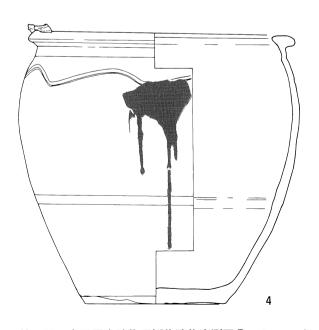
第3章 調査の結果



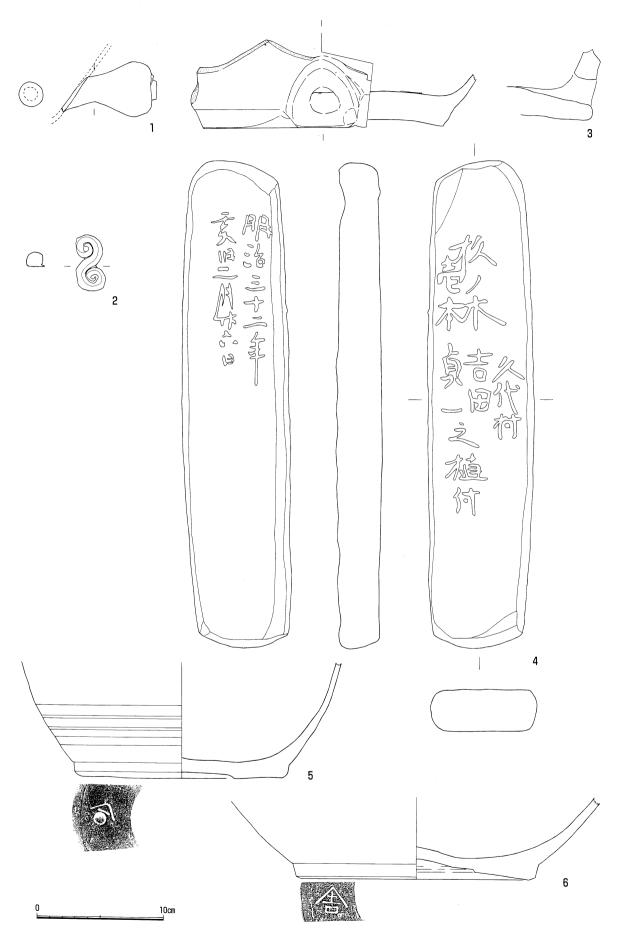




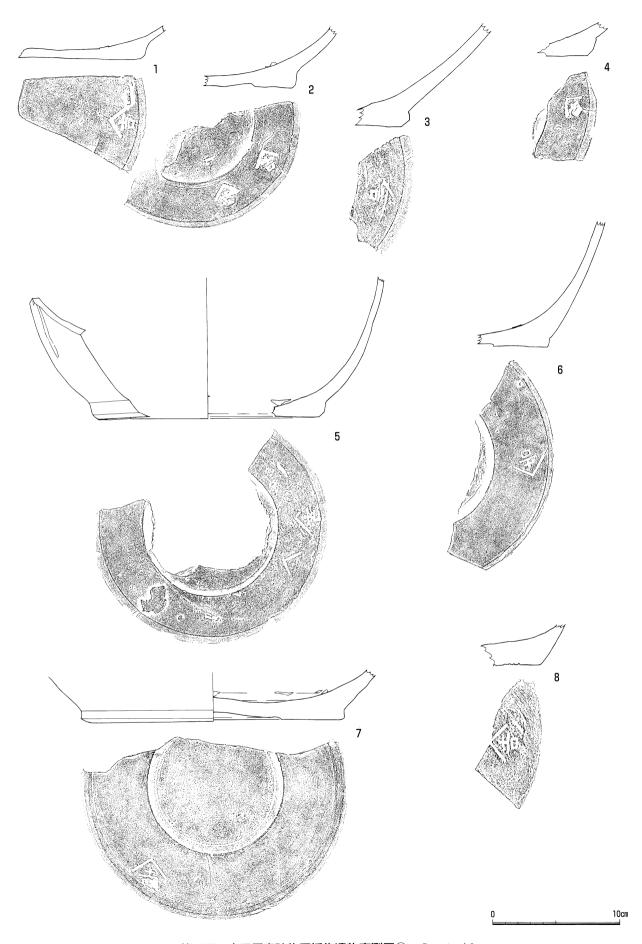


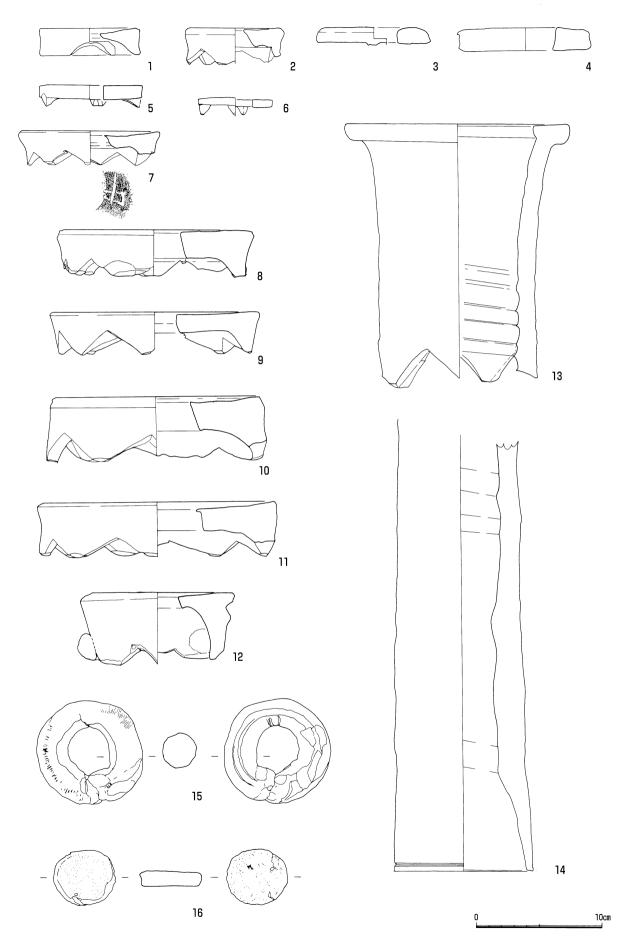


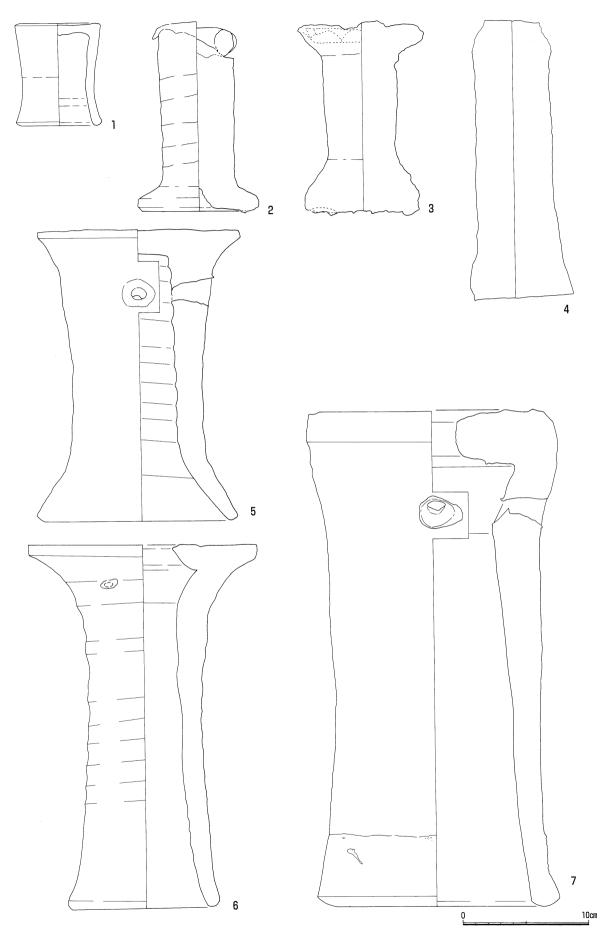
0 10cm



第27図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図9 S = 1 / 3



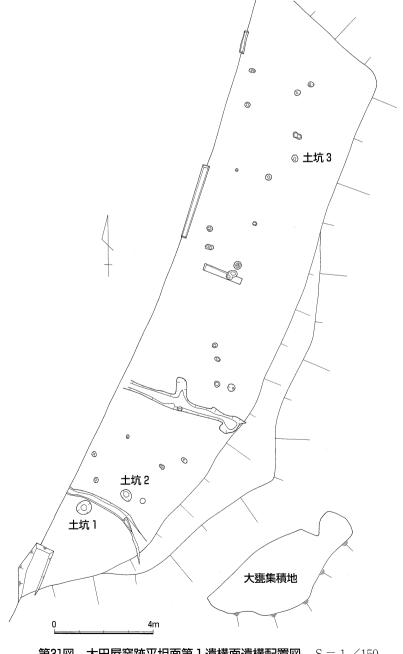




棄によって徐々に谷側へ拡張、せり出していったようで、二面を遺構面として捉えることができた。 上層である第1面は、平らに整地された面から、溝状遺構や、ピット、土坑を検出した。土坑1 は未使用の瓦窯詰め道具が集積してある80cm×70cm深さ20cmの浅い擂鉢状の土坑である。土坑2は 80cm×60cm深さ50cmの素掘り土坑である。土坑3は大甕が埋め込まれた50cm×50cm深さ65cmの土坑 である。これらは製作作業に関連したものと思われる。また、後に述べる平坦面第2面の建物跡1 が埋没した所には完形の大甕や捏鉢等が多数集積されていた。

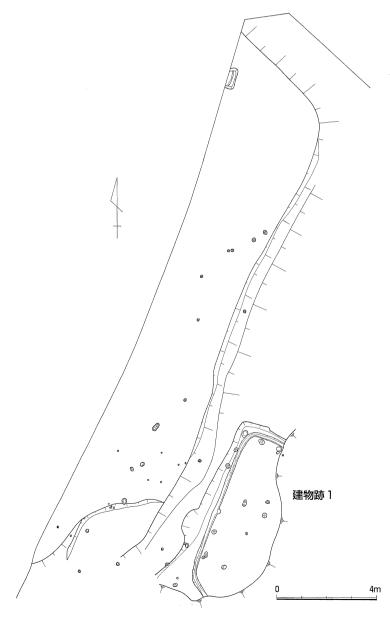
第2面は上層で検出した第1面の下層である。第1面と第2面の間には、陶器の胎土となる白色 粘土や胎土に混入する砂粒などを多く含む土に陶器の小片を含む土層や、陶器を全く含まない褐色 の畑作でもされたような厚い造成土で造成されていた。

第2面では、ピット多数、土坑4、建物跡1が検出された。建物跡1は斜面の中段を雛壇状に削

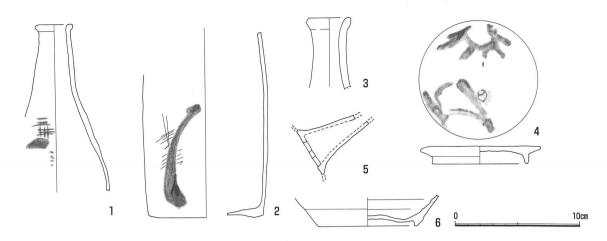


第31図 大田屋窯跡平坦面第1遺構面遺構配置図 S = 1 / 150

り出して造られた加工段をさらに大きくL字状にカットして造られている。この雛壇状の加工段は幅約1mで、一端は建物跡1で終結し、一端は緩やかな傾斜を持って1号窯北側の作業場へと通じており、1号窯との作業場として同時期に使用されたようである。建物跡1は、柱跡と思われるピットはいずれも直径約20cmと小型であり、小規模な掘立柱建物があったと思われる。検出した建物跡1とはやや軸を異にして幅20cm深さ10cmの浅い溝跡3を検出しており、建て替えたものと思われる。床面からは第33図のような陶器片が出土しているが、この建物で行われた作業を想定させ得るものではなかった。



第32図 大田屋窯跡平坦面第 2 遺構面遺構配置図 S=1/150



第33図 大田屋窯跡建物跡出土遺物実測図 S=1/3

### 第3節 尾根上調査区

尾根上調査区は、1号窯のある東側斜面調査区の西側、標高66mの丘陵頂部に設定した調査区である。調査前の観察で、2m×3m程の窪地状の地形や斜面をL字状にカットした加工段状の地形が認められたため、製作関連の作業場が存在した可能性が考えられ調査を行った。

その結果、道路状遺構1、池状遺構1とこれに関連した作業場としての段状遺構1を検出した。

#### (1) 道路状遺構(第34図)

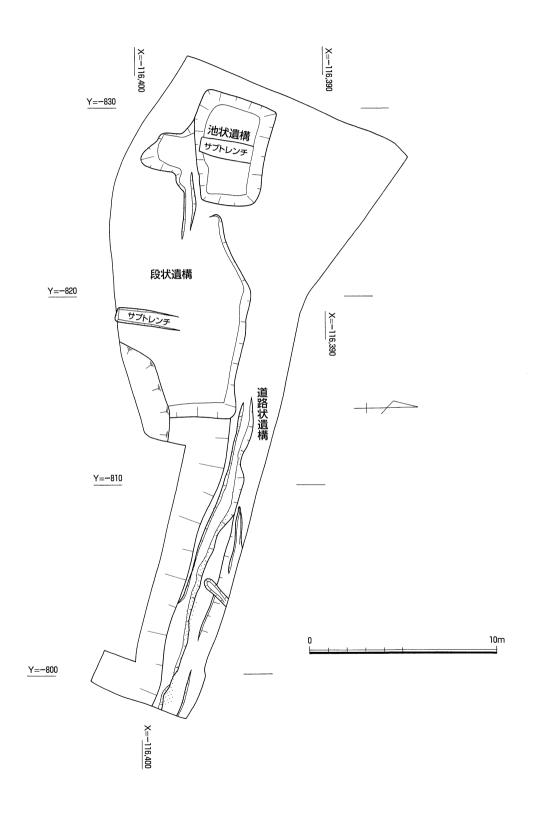
細い尾根筋を削平・盛土によって幅  $1 \sim 2$  m長さ19mに渡って造成している。明瞭な削平・造成の痕跡は認められなかった池状遺構・加工段状遺構の周辺は、造成の痕跡は認められなかったものの、緩やかな自然地形を利用して通路として機能していたと思われる。盛土の土留めとして、窯道具のハリを多く使用している(第34図のスクリーントーン部分が土留め遺構)

### (2) 池状遺構(第35図)

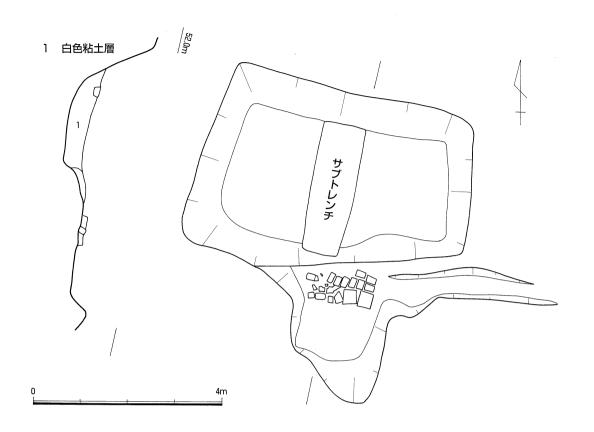
尾根の最も高い位置で検出した。幅3m×2m深さ1.7mの長方形の素掘りの土坑に不整形の深さ0.5mの浅い土坑が附属したもので、附属土坑の底には窯に使用されたトンバリが転用され、平らに整えられている。附属土坑は池状遺構の東側の段状遺構と細い通路でつながっている。池状遺構の内部には混入物の少ない白色粘土が堆積しており、粘土の精製の作業を行ったものと思われる。池状遺構の西側の調査区外には同様の窪地がいくつかあり、製品の工程によりこれらの池を使い分けて粘土の精粗を分けたと思われる。池状遺構からは第36図の陶器が出土している。

### (3)段状遺構(第34図)

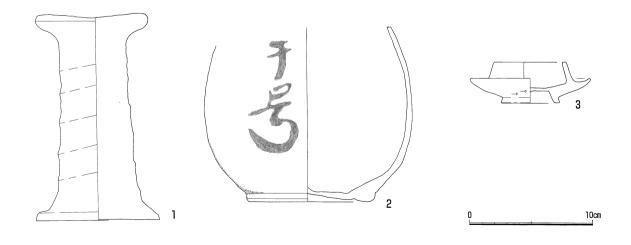
池状遺構の東にある幅11m×7.8mの平坦面である。斜面をL字状にカットし、谷側に盛土を行って平坦面を造り出しているが他に明瞭な遺構は検出されなかった。池状遺構とあわせて作業場として機能していたものであろう。



第34図 大田屋窯跡尾根上調査区遺構配置図 S=1/200



第35図 大田屋窯跡池状遺構実測図 S = 1 / 80



第36図 大田屋窯跡池状遺構出土遺物実測図 S=1/3

## 第4章 まとめ

前章までに述べた大田屋窯跡の成果をまとめると次のようになる。

- ①発見された窯跡は2基(1基は調査区外=2号窯)であり、いずれも連房式登り窯である。1 号窯より2号窯の方が平面規模・造成規模ともに大きい。
- ②1号窯では、窯本体・作業場・陶器を廃棄した物原が同一丘陵上にまとまって配置されていた。
- ③1号窯・2号窯で生産されたものは、陶器では甕・片口・摺鉢・捏鉢・壷類がほとんどを占めるが、瓶・椀類・皿・徳利といった小型品も出土している。また1号窯の初期には瓦も生産されていたことが判明した。
- ④操業年代は、物原から出土した他窯搬入磁器の年代幅が幕末~大正期を中心とする時期であること、1号窯操業時の物原から「明治三十二年」銘のある陶板が出土していること、聞き取り調査で2号窯については昭和20年頃には既に廃窯され荒廃していたことをあわせて考えると明治・大正期を中心に操業を行ったものと見られる。

上記①~④の事項を検討するにあたって、近年の近世後半以降の石見焼の研究動向を見てみると、地元研究者により文献史料を援用しながら丹念な聞き取りと分布調査が行われ、窯跡の分布状況をまとめたり、地域ごとの製品の変遷や特徴などの研究が行われている。これらの研究がきっかけとなって石見焼が文化財として取り扱われるようになったことは意義深く、少ない発掘調査による成果を補う重要な資料にもなっている。また、発掘調査についてみると、1980年代以降、現在までに本遺跡を含めると15例の調査例が知られており、これらの遺跡の年代は、近世後半から昭和30年代までの幅広い年代にわたっている。文献6では発掘された陶器窯を中心に立地や関連遺構、陶器の変遷の検討が行われ、明治期の終わり頃を境に主要製品にそれ以前と異なる傾向があり、窯の規模も大きくなることが指摘されている。この要因としては石見焼製陶業組合の組織化に伴う販路拡大や規格化があげられている。

これらの研究を踏まえ大田屋窯跡についてみると、①で述べた窯本体の規模の違いは1号窯と2号窯の築造時期の違いを表しており、1号窯がより古い時期のものであることが想定されよう。③の本窯製品では、甕・摺鉢・片口といった主要製品を文献6で示す陶器の変遷に当てはめると、明治末期以降の特徴を備えたものであることが分かる。一方、他窯搬入磁器から推定される年代幅からいうと幕末~大正期という時期幅があり、陶器の年代と他窯搬入磁器の年代の間には若干の隔たりがあることになる。これは他窯搬入磁器の生産された年代と実際に使用された年代の違いとも考えられようが、当窯においては明治末年以前に、既に主要製品の規格化が進んでいたことを表すものであり、他窯搬入磁器の年代にあわせた築窯年代の見直しも必要となるのではないかと思われる。また規格品とは別に、直接注文の特注品と見られる独自性の強い製品も見られ(第19図1~7などの小型品)、この両方を生産していたということが大田屋窯の特徴と言うことができよう。

石見焼生産遺跡の発掘調査は、「物原」と呼ばれる不良製品廃棄場にある陶器等の量が膨大であることや窯の規模・構造が大きく複雑であることなどから、通常の遺跡の発掘調査の手法をそのまま用いることが困難なことが多い。しかし、特に明治期末以降の新しい窯跡では、事前の聞き取り

調査で多くの情報を得ることが可能であれば、物原の製品を部分回収に留めたり、回収する際の手段に重機を用いたりするなど、調査に要する労を省力化することは可能であろう。窯の築窯年代や操業時期、製品の特徴や傾向を明らかにすることを目的とした効率的な調査を行う必要があるのではないだろうか。

石見焼については、これまでに述べたように調査例は乏しく、研究の途についたばかりであるため、起源はおろか製品の特徴や変遷について言及できる資料も充分ではないのが現状であろう。これを補完するためには、今後は消費地遺跡から出土している近世陶器群の中から石見焼と思われるものを抽出し、その再評価を行う必要性があるとともに、さらに古い時期の窯跡が調査例の増加を待って時代を追っての製品群の変遷を検討する事も必要があるのではないだろうか。

#### 註

- (1) 主なものに文献9、文献10、文献16などがある。
- (2)「主要製品の異なる傾向」とは、片口・擂鉢・甕といった主要製品が大正期以前の製品では形態や釉薬・胎土が窯によって異なる特徴の製品があったり時間的な変遷が追えるのに対し、大正期以降の製品では現代のものまで含み窯ごとの特徴が希薄で統一的な規格で生産されている、ということである。具体的には片口鉢では「器高に対し口径が低くなる」、「高台は径が広がり高さは低くなる」、「口縁部の玉縁は折り返した縁がきれいに揃っている」、「注口は短く切られ角度も低くなる」「透明度の高い並釉は高台と底部を除く全面にかけられる」ことなどで、擂鉢では「(古い時期のものと比べると)口径に対し器高の低いプロポーションになる」、「口縁端部は玉縁状に肥厚する」「底部は中心が盛り上がり、見込みには高台の跡が残る」、「(釉薬は)赤みのある来待釉が高台と底部を除く全面にかけられる」ことなど、甕では「口(=口縁部)は大きく寸胴気味」である点である。

### 参考文献

- 1 熱田貴保「石見における近世の窯業生産」『八雲立つ風土記の丘No122・123』1993
- 2 建設省浜田工事事務所·島根県教育委員会『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I (鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡)』1995
- 3 建設省浜田工事事務所·島根県教育委員会『嘉久志遺跡·飯田C遺跡·古八幡付近遺跡——般国道9号江 津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』1997
- 4 建設省浜田工事事務所·島根県教育委員会『神主城跡·室崎商店裏遺跡·古八幡付近遺跡——般国道 9 号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—』 2000
- 5 国土交通省·島根県教育委員会『恵良遺跡 堂々炭窯跡 上条遺跡 水戸 (三戸) 神社跡 (上条古墳) 立女遺跡 一般国道 9 号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 IV 』 2001
- 6 国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会『石見焼関連遺跡調査報告1 (飯田A遺跡・長東坊師窯跡) -一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V-』2001
- 7 国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会『石見焼関連遺跡調査報告2 上府八反原窯跡(佐々木 窯跡)−一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI−』2001
- 8 江津市教育委員会『平成3年度埋蔵文化財調査報告書』1992
- 9 江津市文化財研究会『石見潟 第十・十一号』1986
- 10 江津市文化財研究会『石見潟 第十三号』1988
- 11 島根県教育委員会『島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』1992
- 12 島根県教育委員会『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅲ-窯業関連遺跡-』1985
- 13 島根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』1992
- 14 浜田市『浜田市誌 下巻』1973
- 15 原 祐司「生湯窯跡 | 『八雲立つ風土記の丘No122·123』 1993
- 16 平田正典『石見粗陶器考』1979
- 17 宮本徳昭「江津市の石見焼」『八雲立つ風土記の丘No122・123』1993

## 大田屋窯跡出土遺物観察表(1)

	写 真				法	量 (	cm)			
挿図番号	図版	出土地点	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	釉 薬	その他
第10図 1	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	蓋	7.2	_	1.9	密	並釉(外面のみ)	
2	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	蓋	7.7		1.7	密	並釉 (外面のみ)	
3	PL9	1 号窯 赤褐色土	陶器	蓋	7.2	_	1.6	密	並釉 (外面のみ)	外面に呉須絵あり
4	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	蓋	9.1		1.9	密	並釉 (外面のみ)	
5	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	蓋	8.6		4.0	密	並釉 (外面のみ)	外面に呉須絵あり
6	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	蓋	11.4	_	5.8	密	並釉	
7	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	片口鉢	11.0	7.2	6.8	密	並釉	
8	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	小壺	7.6	6.8	13.0	密	並釉	
9	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	鉢	20.0	10.9	11.4	密	並釉	内面底部径9.7cmのハリ跡
10	PL9	1号窯 赤褐色土	陶器	鉢	20.6		11.4	密	並釉	内外面とも施釉 外面底部回転ナデ内面底部 径8.8cmのハリ跡
11	PL9	1 号窯 赤褐色土	陶器	鉢	22.4	11.8	12.5	密	並釉	内面底部11.1cmのハリ跡
. 12	P L 10	1 号窯 赤褐色土	窯道具	盛鉢	28.0	_	_	粗	_	
13	P L 10	1号窯 赤褐色土	窯道具	盛鉢	28.3	_	_	粗		
14	P L 10	1 号窯 赤褐色土	窯道具	盛鉢	30.4	_	_	粗		
第11図 1	PL9	1 号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	8.4		1.7	密	_	脚を5個はりつける
2	PL9	内部 赤褐色土	窯道具	27.1)	9.6		2.7	粗	_	
3	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	8.0	_	2.8	粗	_	
4	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	12.1	_	3.7	粗	_	
5	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	15.3	_	3.4	粗	_	
6	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	14.8	_	2.5	粗	_	
7	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	6.9	_	3.6	粗	_	
8	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	7.0	-	4.3	粗	_	
9	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	211]	9.9	_	5.8	粗		
10	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	9,9		5.6	粗	_	
11	PL9	1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	11.8	-	6.7	粗	_	
12	PL9	1号窯 焚庭造成中	窯道具	ハリ	9.3	7.9	4.3	粗	_	
13		1号窯 赤褐色土	窯道具	ハリ	10.9		4.4	粗	_	
第14図 1	P L 10		陶器	大甕	33.3	18.6	37.5 38.0	粗	来待釉	内外面とも施釉 内面底部に、径13.8cmのハ リ跡 外面 底部切り離し後ヨコなで板目痕 残る
第15図 1	PL10	物原 5 区	陶器	大甕	35.0	19.3	37.8	粗	来待釉	内外面とも施釉 内面底部に、径14cmのハリ 跡 外面胴部カキ目あり
2	P L 10	物原V区―11	陶器	大甕	34.2	17.4	39.5 - 39.7	粗	来待釉	内外面とも施釉 内面底部に、径13.8cmのハ リ跡 外面底部 切り離し後ヨコナデ
第16図 1	PL11	物原 5 区	陶器	大甕	32.0	18.2	36.5	粗	来待釉	内外面とも施釉 口縁部 ムラのある施釉 内面底部、径15.2cmのハリ跡 6 ケ 外面底部 切り離し後布目痕
. 2	P L 11	物原 V 区—11	陶器	大甕	32.0	18,0	40.4	粗	来待釉	内外面とも施釉 口縁部 ムラのある施釉 外面胴部 5本のカキ目外面底部 ヘラ切り 離し後ナデ 径12.5cmのハリ跡 他の焼物の 破片か? 多く付着
第19図 1	P L 11	1号窯大口付近表土直下	陶器	碗	11.8	5.8	4.6	密	飴釉	口縁に焼物の釉付着 内外径6.9の焼台のハ リ跡
2	P L 11	物原 5 区	陶器	碗	11.5	6.5	4.6	密	鈶釉	
3	P L 11	物原Ⅱ区造成土2	陶器	Ш	11.7	5.2	3.6	密	並釉	
4	PL11	物原Ⅱ区 造成土	陶器	おろし皿	13.5	6.2	3.9	密	並釉	
5	P L 11	1 号窯北側溝黄褐色土	陶器	猪口	6.6	4.8	6.7	密	飴釉	
6	P L 11	物原 5 区11層以上	陶器	猪口	6.4	4.4	5.0	密	並釉	
7	PL11	物原 5 区11層以上	陶器	猪口	9.0	6.0	6.3	密	並釉	焼成不良による発色不良
8	P L 11	物原 5 区	陶器	花瓶	_	5.4	_	密	並釉	
9	P L 11	物原 5 区	陶器	花瓶	_	6.4	_	密	並釉	
10		物原I区	陶器	燗徳利	3.0	7.8	19.0	密	並釉	
11	1	物原 5 区	陶器	燗徳利	_	7.6		密	並釉	
12	+	物原V区ベルト内	陶器	徳利	2.7	7.7	19.1	密	並釉	
13	-	物原 5 区	陶器	徳利	3,4	9.0	-	密	並釉	
14		物原I区	陶器	徳利	3.4	9.6	26.6	密	並釉	
第20図1	<del>                                     </del>	物原 5 区	陶器	徳利	_	9.6	_	密	並釉	
2	<del> </del>	物原I区	陶器	徳利	_	9.6	-	密	並釉	
	1 1 1 1 2	1808年12	門部	四小山		3.0		TLI	当上 不回	1

## 大田屋窯跡出土遺物観察表(2)

		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		111000			1/-	, ,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	<b>死处( L /</b>	
挿図番号	写 真図 版	出土地点	種別	器種	法 口径	量(底径	cm) 器高	胎土	釉 薬	その他
3	P L 12	物原Ⅱ区	陶器	徳利	_	10.4	_	密	並釉	
4	P L 12	物原I区表土直下	陶器	瓶	4.0	9.2	21.8	密	並釉	
5	P L 12	1 号窯大口付近表土直下	陶器	片口鉢	7.2	6.7	5.9	密	並釉	
6	P L 12	1号窯大口付近表土直下	陶器	片口鉢	14.0	7.5	6.7	密	並釉	
7	P L 12	1号窯大口付近表土直下	陶器	片口鉢	17.2	8.4	7.8	密	並釉	
8	P L 12	1号窯大口付近表土直下	陶器	片口鉢	20.5	9.5	10.5	密	並釉	
第21図 1	P L 12	物原Ⅱ区造成土2	陶器	鉢	16.0	7.1	6.2	密	_	
2		物原Ⅱ区造成土2	陶器	鉢	18.5	7.4	5.9	密		
3	P L 13	1 号窯北側溝黄褐色土	陶器	土瓶蓋	3.6	_	2.7	密	黒色釉	·
4	P L 13	物原 5 区	陶器	蓋	7.3	_	2.0	密	黒色釉	
5	P L 13	物原 5 区	陶器	蓋	6.8	_	1.5	密	黒色釉	
6	P L 13	物原5区ベルト内	陶器	蓋	6.2	3.0	_	密	黒色釉	
7	P L 12	物原5区	陶器	蓋	7.7	_	3.8	密	並釉	
8	P L 13	物原5区	陶器	蓋	11.7	_	6.4	密	並釉	
9	P L 13	1 号窯南側溝内	陶器	蓋	11.6	_	5.4	密	並釉	
10	P L 13	物原 5 区	陶器	蓋	9.7			密	並釉	
11			陶器	蓋	11.6		4.6	密	来待釉	
12		1号窯大口付近表土直下	陶器	蓋	14.5	_	6.6	密	並釉	
第22図 1		物原5区11層以上	陶器	植木鉢	10.1	5.0	5.9	密	来待釉	
2	P L 13	物原5区11層以上	陶器	植木鉢	15.6	7.5	11.2	密	並釉	
3	P L 13		陶器	植木鉢	15.4	7.6	13.0	密	並釉	
4		物原5区ベルト内	陶器	植木鉢	17.0	9.8	16.8	密	並釉	
5	P L 13		陶器	植木鉢	13.6	8.0	11.0	粗	黒色釉	
6		物原 5 区	陶器	擂鉢	14.3	8.8	8.5	密	来待釉	
7		1号窯大口付近表土直下	陶器	擂鉢	13.8	7.4	5.7	密	来待釉	
8	P L 13		陶器	擂鉢	14.6	7.6	6.5	密	来待釉	
9	P L 13	物原 5 区	陶器	擂鉢	14.3			密	来待釉	
第23図 1	P L 14		陶器	擂鉢	18.0	8.6	8.0	密	来待釉	
2	P L 14		陶器	擂鉢	19.1	7.8	9.3	密	来待釉	
3	P L 14		陶器	擂鉢	26,2	13.2	11.7	密	来待釉	
4	P L 14	物原 5 区 東西ベルト	陶器	擂鉢	31.2	15.4	14.1	密	来待釉	
第24図 1	P L 14	物原I区	陶器	小壺	9.1	8.0	10.7	密	並釉	
2	P L 14	物原 5 区	陶器	小壺	9.8	8.6	12.0	密	並釉	
3		物原 5 区	陶器	小壺	8.0	8.8	12.6	密	並釉	
4	-	物原5区ベルト内	陶器	小壺	10.5	9.1	15.0	密	並釉	
5		物原I区	陶器	小壺	11.0	9.5	13.5	密	並釉	
6	-	物原 5 区	陶器	小壺	8.1	6.9	11.1	密	飴釉	
7	-	物原 5 区	陶器	小壺	11.6	8.8	15.0	密	並釉	
8	<del> </del>	物原I区表土層の中	陶器	小壺	10.1	8.0	16.0	密	並釉	
9		物原 5 区	陶器	小壺	10.7	10.9	16.6	密	並釉	
第25図 1	<del> </del>	物原I区、	陶器	小壺	9.2	6.8	9.3	密	飴釉	
2		物原 5 区11層以上	陶器	小壺	9,6	6.8	9.9	密	来待釉	
3	-	物原5区11個以上	陶器	小壺	9.5	7.7	10.3	密	始 始 和	
4		物原I区	陶器	小壺	9.0	8.2	12.2	密	並釉	
5	+	物原I区	陶器	小壺	9.6	7,2	10.2	密	台釉	
6		物原I区表土層の中	陶器	小壺	11.6	7.2	11.8	密	来待釉	
7	<del>                                     </del>	物原I区	陶器	小甕	12.7	7.0	13.1	密	来待釉	
8		物原 5 区	陶器	小甕	13.1	8.2	15.1	密	来待釉	
9	-	物原I区	陶器	小甕	13.0	8.4	15.9	密	来待釉	
		物原 5 区	陶器	小甕	13.0	9.1	16.4	密	来待釉	
		物原 5 区	陶器	小甕	15.0	10.6	17.6	密	来待釉	
第26図 1	1 10	初原 5 区 S H 8 5	陶器	小甕	16.8	13.8	18.6	粗粗	来待釉	
第20回 I 2	-	III X	陶器	中甕	22.6	15.4	22.4	粗粗	来待釉	
3	D [ 16	SM90	陶器	中甕	23.0	16.4	25.2	粗粗	来待釉	
4		S M 2 6	陶器	大甕	29.2	18.5	35 <b>.</b> 3	粗粗	来待釉	
<b>给97</b> 阿 1	D I 17		RQU DA	母> マブ ☆屋			35.8	sphre	<b>市往</b> 場	
第27図 1		物原 5 区11層以上	陶器	雪平鍋			_	密密	来待釉	⇒ □ (+ >=
2		北側溝黄褐色土	陶器	不明		10.0	_	密	黒色釉	注口付甕
3	<del> </del>	物原 5 区	陶器	注口付大甕		19.0	-	粗	. —	
4	PL17	物原 5 区	手づくね	陶板	38.3	8.6	3,3		_	

## 大田屋窯跡出土遺物観察表(3)

	~ ±				34-	量 (cm)		T				
挿図番号	写 真図 版	出土地点	種別	器 種	法口径	底径	器高	胎土	釉 薬	その他		
5	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢	_	17.0		粗	来待釉	底部に窯印あり		
6	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢		17.9	_	粗	並釉	底部に窯印あり		
第28図 1	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢			16.9	密	並釉	底部に窯印あり		
2	P L 18	物原 5 区	陶器	捏鉢		8.2		粗	並釉	底部に窯印あり		
3	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢	_	_	18.0	密	並釉	底部に窯印あり		
4	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢	_	20.4	_	密	並釉	底部に窯印あり		
5	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢	_	17.4	_	密	並釉	底部に窯印あり		
6		物原 5 区	陶器	捏鉢	_	_	_	粗	来待釉	底部に窯印あり		
7	P L 18	物原5区	陶器	捏鉢	_	19.8	_	密	並釉	底部に窯印あり		
8		1号窯赤褐色層	陶器	捏鉢	21.4	_	_	粗	並釉	底部に窯印あり		
第29図1	P L 19	平坦面(南) 黒色土	窯道具	ハリ	8.1		1.7	密	_	脚は、はりつけ		
2	P L 19	物原2区	窯道具	ハリ	5.8	_	_	密	_	脚は、はりつけ		
3	P L 19	物原 5 区	窯道具	ハリ	_	8.9	1.9	粗				
4	P L 19	物原 5 区	窯道具	251)	10.5	10.6	1.8	粗	_			
5	P L 19	物原2区1層	窯道具	ハリ	8.0	8.0	2.2	粗	_			
6	P L 19	物原5区11層以上	窯道具	ハリ	7.0	2.8	_	粗	_			
7	P L 19	物原2区表土直下層	窯道具	ハリ	11.0	_	2.7	粗	_			
8	P L 19	1号窯 黒色表層	窯道具	ハリ	15.4		3.7	粗	_			
9	P L 19	平坦面(南) 黒色土	窯道具	ハリ	15.3	_	3.4	密	_			
10	P L 19	1号窯表層	窯道具	ハリ	16.0	_	5.1	粗				
11	P L 19	平坦面(北)黒色土	窯道具	ハリ	18.0		4.3	密	_			
12	P L 19	物原 5 区	窯道具	ハリ	11.0	_	5.7	粗	_			
13	P L 19	物原2区	窯道具	251)	17.5	_	20.8	粗				
14	P L 19	物原6区	窯道具	ヌケ	_	11.0		粗	_			
15	P L 19	物原 5 区ベルト内	窯道具	ハリ	_	_	2.7	粗	_	手づくね		
16	P L 19	物原 5 区	窯道具	もみ土	_	_	1.2	粗	_			
第30図1	P L 19	物原 5 区	窯道具	ヌケ	6.7	6.0	8.1	粗	_			
2	P L 19	物原6区	窯道具	トチン	_	8.8	15.0	粗	_			
3	P L 19	物原 5 区	窯道具	トチン	9.4	8.9	14.8	密	_			
4	P L 19	物原11層以上	窯道具	トチン	_	8.2	21.8	粗	_			
5	P L 19	物原1区表土直下	窯道具	ヌケ	16.0	14.6	22.9	粗	_			
6	P L 19	物原1区表土直下区	窯道具	ヌケ	18.0	11.0	28.7	粗	_			
7	P L 19	物原1区表土直下	窯道具	ヌケ	18.7	16.0	39.0	粗	_			
第33図1	P L 23	白色粘土層	陶器	燗徳利	_	_	_	密	並釉			
2	P L 23	HSB01 岸本	陶器	燗徳利	_	9.2	_	密	並釉			
3	P L 23	SB01白色粘土層	陶器	燗徳利	3.4	_		密	並釉			
4	P L 23	SB01白色粘土層	陶器	蓋	_	_	_	密	並釉			
5	P L 23	SB01白色粘土層	陶器	急須		_	_	密	並釉			
6	P L 23	SB01白色粘土層	陶器	徳利			_	密	並釉			
第36図1	P L 23	4 区池内表土層	窯道具	トチン	9.0	9.9	16.6	粗	_			
2	P L 23	物原表採	陶器	徳利	_	9.8		密	並釉			
3	P L 23	池内表土	陶器	灯明皿	5.8	4.8	3.3	密	並釉			

# 大田屋窯跡出土遺物観察表<写真のみ掲載>(4)

	出土地点	陶器		法	量 (cm)				
挿図番号			器種	口径	底径	器高	胎土	釉 薬	その他
P L 20 - 1	物原6区	窯道具	陶製タタキ当具か?	_	_	_	密	来待釉	
P L 20 - 2	物原1区黒褐色土	陶製品	陶製すずり	_		_	密	来待釉	
P L 20 - 3	物原2区	陶製品	陶製るつぼか?	4.6		6.4	審	なし(素焼き)	手づくね
P L 20 - 4	物原2区表土直下	窯道具	陶製かんもん	9.3	3.3	9.7	密	一部並釉	ろくろ座の部品
P L 20 - 5	物原 5 区黒色土	窯道具	陶製かんもん	4.0	4.0	2.3	密	一部並釉	
P L 20 - 6	1 号窯北側溝黄褐色土	窯道具	陶製かんもん	5.5	5.5	1.9	密	一部並釉	
P L 20 - 7	物原1区	窯道具	陶製かんもん	4.2	4.2	1.9	密	一部並釉	ろくろ座の部品
P L 20 - 8	Ⅱ区池内表土層	陶製品	陶製十能	_	_	_	密	来待釉	
P L 20 - 9	物原Ⅲ区	陶製品	陶製盛鉢	29.3	11.2	11.3	粗	なし(素焼き)	
P L 20-10	大田屋瓦道具集中地	窯道具	もみ土	_	_	_	粗		瓦焼成時に使用
P L 20-11	1 号窯赤褐色土	窯道具	もみ土	_	_	_	粗		瓦焼成時に使用
P L 20-12	1号窯黒色表土層	窯道具	もみドロ	_	_	_	粗		<b>変焼成時に使用</b>
P L 20-13	1 号窯赤褐色土	窯道具	ハセ		_	_	密		瓦焼成時に使用

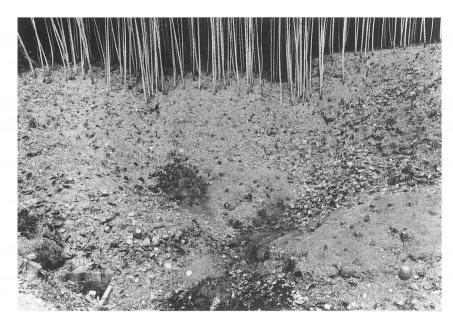
			T	34-	B. /	量 (cm)			
挿図番号	出土地点	陶器	器種	法 口径	底径	器高	胎土	釉 薬	その他
P L 20-14	1号窯赤褐色土	窯道具	もみドロ	_			粗	-	甕焼成時、口縁部に使用
P L 20-15	1号窯赤褐色土	窯道具	もみドロ	_	_	_	粗		甕焼成時、口縁部に使用
P L 20-16	1号窯赤褐色土	窯道具	もみドロ	_	_	_	粗		甕焼成時、口縁部に使用
P L 20-17	1号窯赤褐色土	窯道具	もみドロ	_	_		粗		甕焼成時、口縁部に使用
P L 20-18	物原2区	窯道具	ハセ	_	_		密		瓦焼成時に使用
P L 20-19	大田屋平坦面1瓦道具	窯道具	ハセ	_	_	_	密		瓦焼成時に使用
P L 20-20	物原 I 区 1 号窯北側溝黄 褐色土 1 号窯赤褐色土 1 号窯焚庭造成土	窯道具	ハセ	_	_	_	密		瓦焼成時に使用
P L 21 - 1	物原VI区表採	陶製品	土人形(カエル)	_	_	_	密	一部来待釉	
P L 21 - 2	物原2区2面	陶製品	土人形 (人)	l —	_	_	密	一部来待釉	
P L 21 - 3	物原1区第1黒色土層	陶製品	土錘	2.8	2.7	7.0	密	来待釉	
P L 21 - 4	物原2区表土直下	陶製品	土錘	2.7	3.0	5.5	密	来待釉	
P L 21 - 5	物原Ⅱ区2層	陶製品	おろし器	_	_	_	密	並釉	
P L 21 - 6	物原Ⅱ区2層	陶製品	土人形(鳥?)	_	_	_	密	一部来待釉	
P L 21 - 7	大田屋SM08周辺	瓦	棟瓦 (鬼瓦)				粗	来待釉	
P L 21 - 8	屋根上池内表土	瓦	棟瓦 (鳥伏間)	_			粗	来待釉	
P L 22 - 1	物原Ⅱ区	瓦	棟瓦 (鬼瓦)	_	_	_	粗	来待釉	
P L 22 - 2	大田屋 S m.06.08	瓦	棟瓦 (鬼瓦)	_	_	_	粗	来待釉	
P L 22 - 3	物原I区	磁器	碗	_		_	密		肥前系窯 銅板染付 明治
P L 22 - 4	物原Ⅱ区	磁器	碗	_	_		密		肥前系窯 銅板染付 明治
P L 22 - 5	物原Ⅱ区表土直下 1層	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 銅板染付 明治
P L 22 - 6	物原Ⅱ区表土直下 1層	磁器		_			密		肥前系窯 型紙染付 明治
P L 22 - 7	物原I区	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 型紙染付 明治
P L 22 - 8	物原 3 区表土直下層	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 型紙染付 明治
P L 22 - 9	物原 5 区	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 型紙染付 明治
P L 22-10	物原Ⅱ区2層	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 型紙染付 明治
P L 22-11	物原Ⅱ区2層 表土直下	磁器		_	_	_	密		瀬戸·美濃系窯 型紙染付 明治
P L 22-12	物原Ⅱ区1層	磁器		_			密		瀬戸·美濃系窯 型紙染付 明治
P L 22-13	物原1区表土直下	磁器		-	_	_	密		肥前系窯 手描き 明治
P L 22-14	物原2区2層 2区表土直下	磁器				_	密		肥前系窯 手描き 幕末
P L 22-15	1号窯北側溝黄褐色土	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 手描き 幕末
P L 22-16	1号窯北側溝黄褐色土	磁器		_	_	_	密		肥前系窯 手描き 幕末
P L 22-17	物原2区2層	磁器		_		_	密		肥前系窯 手描き 幕末
P L 22-18	物原Ⅲ区2層	磁器		_	_	_	密		不明窯(中国地方窯か) 手描き 幕末~明治か
P L 22-19	物原Ⅱ区池内表土層	磁器		_	_	_	密		不明窯(中国地方窯か) 手描き 幕末~明治か
P L 22-20	物原Ⅲ区 表採	磁器		_	_	_	密		不明窯(中国地方窯か) 手描き 幕末~明治か
P L 22-21	太田屋窯跡2区2層 物原 5区 2区黄色造成土層 2区表土直下	磁器	ш	_	_	_	密		肥前系 銅板染付 大正
P L 22-22	物原2区平坦面直下	磁器	人形 (這子)	_		_	密		



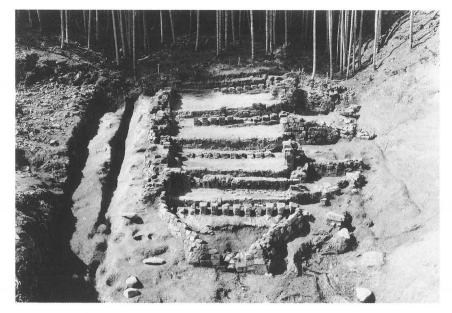
大田屋窯跡東側斜面調 査区調査前近景(南から)



大田屋窯跡物原 2 ~ 4 調査前近景(東から)



大田屋窯跡 1 号窯調査 前近景(東から)



大田屋窯跡 1 号窯完掘 (東から)



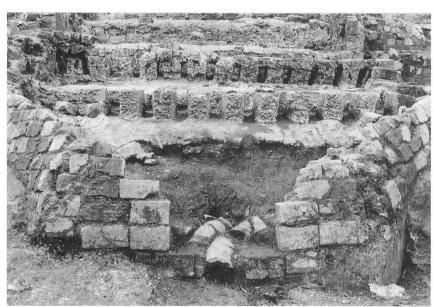
大田屋窯跡 1 号窯完掘 (北から)



大田屋窯跡 1 号窯完掘 (南から)



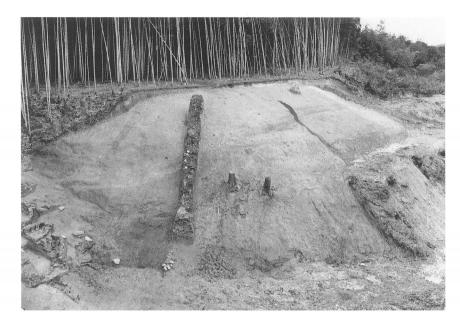
大田屋窯跡 1 号窯溝状 遺構断面(東から)



大田屋窯跡 1 号窯大口 焚き口部分(東から)



大田屋窯跡 1 号窯大口 排水施設(上から)



大田屋窯跡平坦面完掘 (南東から)



大田屋窯跡物原2堆積 状況



大田屋窯跡物原2堆積 状況